

公益財団法人 中国四国酪農大学校創立50周年記念

50年のあゆみ



平成27年11月



公益財団法人 中国四国酪農大学校
公益財団法人 中国四国酪農大学校同窓会

公益財団法人 中国四国酪農大_学校創立50周年記念

50年のあゆみ



校 歌

作詞・作曲 水野 康孝

ひる - せん - の の の は て と お く あ
 お げ ば た か し だ い せん - や み
 よ こ ん べ き - の そ ら ¹² の も - と は
 た ₃ ひ る が え す わ が ほ こ う
 が や か に か が - や か に

一、蒜山の野の涯遠く

仰げば高し大山や

見よ紺碧の空のもと

旗ひるがえす我が母校

二、平和の鐘の鳴り出づる

若き世代の朝ぼらけ

希望燃え立つ酪農の

道は我らと共にあり

三、くれないもゆる頬をあげて

力のかぎり逞ましく

行けや我友若人よ

栄光永久に輝やかに

輝やかに



学校全景



西茅部本校(昭和39年)



旧本館(昭和40年代)



西茅部本校(平成18年)



第一牧場全景(昭和43年)



旧本館裏でのホルスタインの放牧(昭和62年)



学校全景



三木ヶ原牧場(昭和39年)



第二牧場(平成17年)



三木ヶ原放牧風景(平成14年)



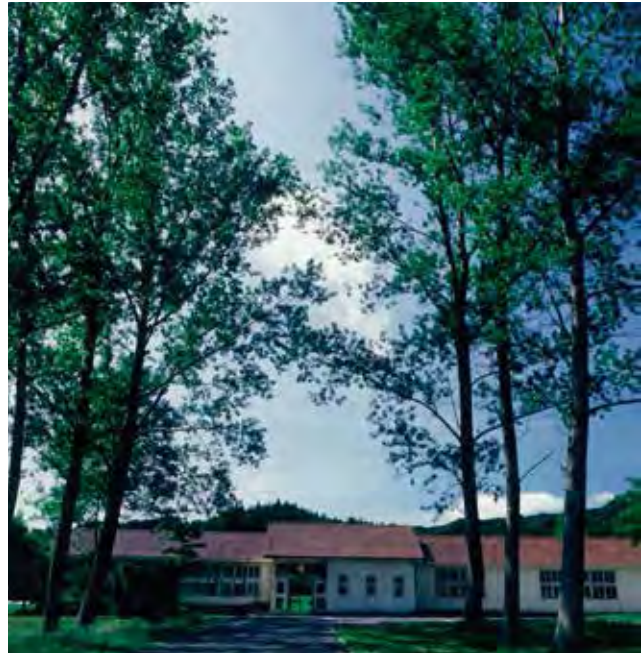
第二牧場(平成25年)



学校全景



雪景色 旧本館



旧本館(平成7年)



廊下



玄関



事務室



本館(平成18年 冬)



コンピュータールーム



視聴覚教室



本館 廊下



図書室



学校全景



第一牧場搾乳舎(昭和50年)



第一牧場旧牛舎(現在は分娩牛舎として使用)(平成23年)



第一牧場旧牛舎 新乾乳・初任牛牛舎(平成27年)



第一牧場旧牛舎(平成23年)

第一牧場搾乳牛舎 作業風景



第一牧場育成牛舎



第一牧場堆肥舎



新第一牧場搾乳牛舎(平成18年)



学校全景



第二牧場全景(平成15年)



第二牧場牛舎内



第二牧場全景(平成5年)



第二牧場 事務所(平成6年)



第二牧場 ロータリーパーラー



搾乳風景



学校全景



体育館



体育館でのレクリエーション



旧学生寮(男子寮・食堂)



女子寮



新学生寮



玄関プレートのデザインは
第38期生 芦田(森本)恵美子さんです



ヘルパー研修宿泊施設(平成8年)



第2牧場研修生滞在施設(平成8年)



酪農大学校の一年

4月

- ・入学式
- ・新入生蒜山観光
- ・新入生歓迎会
- ・ジャージースプリングショウ



5月

- ・消防訓練
- ・献血
- ・一番草収穫
- ・畜魂祭
- ・ふれあい広場への初放牧



6月

- ・トラクター免許練習
(無線機を使ったトラクター練習)



7月

- ・オープンキャンパス



8月

- ・オープンキャンパス



9月

- ・蒜山地区共進会
- ・デントコーンの収穫
- ・細断型ロールベラーによる
デントコーン調製作業
- ・津山共進会





酪農大学校の一年

10月

- ・家畜審査演習
- ・岡山県畜産共進会
- ・中国ブロック
農業大学校研修生のつどい
- ・牽引免許練習
- ・フォークリフト運転技能講習



11月

- ・牛削蹄師認定講習会
- ・酪農ヘルパー専門技術員養成研修会



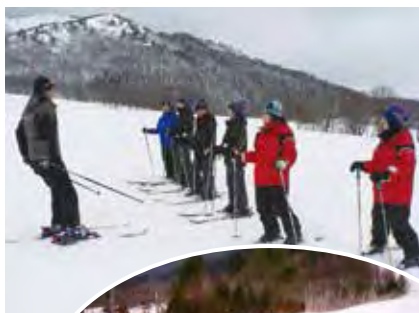
12月

- ・AI講習会
- ・校外研修報告会



1月

- ・ET講習会
- ・レクリエーション
(スキー・スノーボード)
- ・中国四国ブロック
農大プロジェクト発表会



2月

- ・車両系建機運転技能講習
- ・家畜商講習会



3月

- ・卒論発表会
- ・卒業式



目次

ご挨拶	公益財団法人中国四国酪農大学校 理事長	京 博司	1
	公益財団法人中国四国酪農大学校同窓会 会長	長尾 寛人	2
祝 辞	中国四国農政局 局長	仲家 修一	3
	真庭市 市長	太田 昇	4
50周年に寄せて	おかやま酪農業協同組合 代表理事組合長	東山 基	5
	岡山県農林水産総合センター	栗木 隆吉	6
「創立50周年を迎えて」	公益財団法人中国四国酪農大学校 校長	山田 義和	7
新旧役員等名簿			8
歴代校長・副校長(次長)			9
回想録	「20年のあゆみ」より		
	県立酪農大学校創立時の思い出の記	花尾 省治	13
	これからの酪農	惣津 律士	14
	苦心惨胆中国四国酪農大学校の発起	山下 肅郎	15
	「30年のあゆみ」より		
	創立30周年に寄せて	永井 仁	17
卒業生寄稿	香川県(財14期)	妹尾 始	20
	岡山県(財18期)	岸本 美加	21
	岡山県(財36期)	孝本 智子	22
	高知県(財42期)	江渕 辰哉	22
	岡山県(財43期)	長崎 清子	23
	山口県(財44期)	林 純二	24
	岡山県(財45期)	難波 晃大	25
	島根県(財46期)	田原 望実	26
	鳥取県(財47期)	高濱 弘一	27
	岡山県(公財48期)	江草 真一	28
	広島県(公財49期)	藤原 彩香	29
旧職員寄稿		上原 逸史	30
		森本 博之	31
		西家 忠治	32
		馬場 誠	33

在校生寄稿	(公財)中国四国酪農大 同	二年生 一年生	坂本 雄也 村上 咲 34 35
現職員寄稿	教務課長兼第一牧場長		関 哲生 36
学校の沿革			 37
写真でつづる50年			 43
学科目担当講師名簿			 55
現職員名簿・写真			 56
旧職員名簿			 57
出身県別卒業生及び 在校生徒数			 66
卒業生の進路状況			 67
酪農ヘルパー専門技術員 養成研修会の実施状況			 68
酪農フィールド研修の 実施状況			 68
卒業生名簿			 69
編集後記			 82

ご 挨拶

公益財団法人中国四国酪農大学校

理事長 京 博 司



本校は、昭和40年に酪農の担い手養成機関として、雄大な蒜山三座を望む蒜山高原に開学して以来、今年で50周年を迎えることができました。これもひとえに、長年にわたる関係各位の御支援の賜物と、深甚なる謝意を表します。おかげをもちまして、これまで1,207名の卒業生がこの地を巣立ち、その多くが地域の中核的な酪農後継者

として、あるいは法人経営等の牧場や畜産関係団体などで活躍しております。

この50年の間で、酪農は大きく発展しましたが、近年のTPP交渉への対応など、大きな変革期を迎えています。こうした中、企業的酪農経営に関する知識と技術を身につけた次世代のリーダーとなりうる担い手の養成がより一層求められています。

本校では、時代の要請に応えるため、平成23年に専修学校となり、教育体制を充実し、飼料生産基盤に立脚した実践教育や乳製品製造実習の拡充強化を図り、現在は、専修学校としては全国に先駆けて農場HACCPの認証をめざしています。また、社会人研修コースの開設や、今春オープンした学生寮の整備など、魅力ある学校づくりにも努めています。さらに、平成25年4月には公益財団法人に移行して、新たなスタートを切り、公益法人としてふさわしい、効率的な組織運営にも力を傾注しているところであります。

今後とも、西日本で唯一の酪農専門の担い手養成機関としての使命を果たすため、職員一丸となって邁進する所存ですので、関係各位の変わらぬ御指導・御鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げまして、御挨拶といたします。

ご挨拶

公益財団法人中国四国酪農大学校同窓会

会長 長尾 寛人



この度、我が母校、(公財)中国四国酪農大学校が、創立50周年を迎えるにあたり、記念誌を発行し、節目を飾る運びとなりました。

本同窓会は、県立時代も含めると、会員数が約1300名となり、その多くが中国四国地域はもとより、全国各地で酪農や肉用牛経営に従事される他、牧場の従業員、酪農ヘルパー等々畜産に関係した仕事に携わっておられます。デーリイマン等酪農雑誌を眺めていても、酪農大学校の卒業生の掲載記事が多く、各地域のリーダー的な役割を担っておられ、大変心強く感じております。

さて、この度、新たに学生寮が整備されました。この整備にあたり、多額の資金が必要なことから、広く善意の寄附を呼び掛けたところ、同窓会員の方々には、多くの寄附をいただきました。ご厚志につきましては、学生が利用する机、ベッド、洗濯機、乾燥機等備品購入に活用されています。皆様方のご協力に対し、深く感謝を申し上げます。

旧学生寮は、私が卒業した昭和51年に完成し、早いもので、あれから40年が経過しました。この40年の歩みの間には、平成7年の本館の整備を始めとして、平成10年の第2牧場、平成18年の第一牧場と、酪農の近代化に呼応した教育環境の充実が図られ、実践教育を目指す学校の教育理念に適った申し分のない状況となったと感じております。

現在、酪農大学校の入学者の7～8割は非農家出身者であること、半数近くが女子学生であること、九州や関東の遠方からの学生の割合が高くなっていることなど、近隣県の農家出身の男子が中心の我々の時代と学生の状況はかなり異なっていますが、卒業生の多くが牧場の従業員として就農し、自営就農等と併せ、ほぼ全ての学生が畜産関係に従事しているとのことで、酪農家戸数が年々減少している今の酪農情勢の中で、学校の使命である「酪農の担い手確保」に向け、大いに奮闘されており、うれしく思っております。

酪農を取り巻く環境は、年々厳しくなっておりますが、この厳しさにめげる事なく、関係各位のご協力と更なるご尽力により、次代の酪農教育を担う学校として、ますます発展することを祈念し、ご挨拶といたします。

祝 辞

中国四国農政局

局 長 仲 家 修 一



この度、公益財団法人中国四国酪農大学校がめでたく設立50周年を迎えられるに当たり、一言お祝いを申し上げます。

貴校は、実践教育による確かな技術と経営感覚に富む酪農の担い手の養成と、酪農を通じて地域社会へ貢献できる健全にして良識ある人材の育成を行うことを目的とし、昭和40年に設立されて以来、卒業生の多くが、酪農経営の優秀な担い手として、また、畜産関係団体の指導者として全国各地でご活躍されており、誠に頼もしい限りであります。

さて、最近の酪農をめぐる情勢を見ますと、我が国の酪農は、生産者の皆様の努力の積み重ねによる飼養規模の拡大、先進的な経営を実現させており、我が国の農業産出額の約1割を占めるに至っています。

しかし、近年は、飼養戸数や飼養頭数が減少を続けるなど、生産基盤の弱体化により、生乳生産量は減少しており、今後の酪農の持続的な発展を支える対策が求められています。弱体化の背景には、輸入飼料価格の上昇を始めとした国際的な環境変化に加え、農業の生産現場において、高齢化・後継者不足により経営を中止する農家が増える中、酪農においては、収益の改善や飼養規模の拡大のため、機械・施設への投資負担や労働力不足、環境問題等の関係者が直面している課題があります。

平成27年3月に新たな「食料・農業・農村基本計画」が閣議決定され、畜産分野では、新たな「酪農及び肉用牛の近代化を図るための基本方針」が策定されました。この基本方針におきましては、生産基盤の現状を踏まえ、人（担い手・労働力の確保）・牛（飼養頭数の確保）・飼料（飼料費の低減、安定供給）に着目し、関係者が連携・集結し、地域全体で畜産の収益性を向上させる「畜産クラスター」の取組も活用して、家族経営、法人経営ともに地域全体で、畜産の収益性向上と生産基盤の強化を目指します。

我が国の畜産が、今後、健全な発展を遂げて行くためには、経営管理能力に優れた担い手の育成・確保を図ることが最重要な課題であると考えております。

特に、若い活力に満ち、たくましい創造力と行動力に富んだ人材が我が国の酪農の未来を切り開いていくことを期待しており、貴校に期待するところ大であります。

今後とも、幅広い知識を身につけた酪農後継者及び技術者の育成を図る観点から、貴校の役割が一層発揮されますように、関係者の皆様のさらなるご尽力をお願いしますとともに、貴校の益々のご発展と関係者の皆様のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

祝 辞

岡山県真庭市

市 長 太 田 昇



公益財団法人中国四国酪農大学校が設立50周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

貴校は、昭和40年に前身の岡山県立酪農大学校から財団法人中国四国酪農大学校として改組開校されて以来、50年間の長きにわたり、わが国でも数少ない近代的酪農経営能力を身につける教育養成機関として多くの酪農後継者を輩出し、中国四国地方はもとより、全国の酪農業の健全な発展と地域の未来を担う人材の育成に貢献してこられました。

これもひとえに歴代の校長をはじめとした教職員の皆様方の献身的なご努力、そして、地域の皆様の酪農教育への熱き思いとご支援の賜物であり、そのご労苦に対し深く敬意を表する次第であります。

時代は急速な技術革新が日々進展しており、高度化・多様化する時代の課題を的確に捉え、これからの経済社会に対応し得る力を備えた新しい酪農教育が必要とされています。

こうした社会的要請に応えるべく、終始一貫した堅実な教育目標を堅持され、実践教育を通じて、酪農に対する経営感覚や高い専門知識、確かな技術を持つ優れた人材の育成に取り組んでこられた貴校の教育方針には大きな期待を寄せているところであります。

蒜山地域の酪農は、設立当初から貴校との密接な関係のもとに発展してきたものであり、貴校の歴史はまさに蒜山地域の酪農発展の歴史であるといっても過言ではありません。

この記念すべき節目を契機とされ、蒜山の地域に根差し、地域とともに歩んでこられたこの伝統ある中国四国酪農大学校がさらなる飛躍を遂げられますとともに、関係者の皆様のご健勝と一層のご活躍を祈念申し上げます。お祝いの言葉といたします。

弛むことのない酪農史のために…

おかやま酪農業協同組合

代表理事組合長 **東 山 基**



公益財団法人 中国四国酪農大学校が設立50年の歴史を刻まれ、関係される多くの皆様、誠におめでとうございます。心よりお喜びを申し上げます。

幾多の思いを馳せた酪農大学校を一言に蛍雪の窓には語り尽くせぬものであろうと推察し、全ての皆様に敬意を表する次第でもあります。今尚、岡山県が酪農生産地域であるのは、蒜山地区のジャージー振興50有余年の辛苦と中国四国酪農大学校の存在がいかに尊貴であったかと、あらためて歎ずるところです。

又、岡山県内に留まらず他県にも酪農後継者・関係者を輩出し酪農産業発展の役割を十分に果たされ、現在では応募学生の多くが一般家庭の子弟であり、特に女性の進出が目覚ましく将来への期待が育まれています。

又、岡山県内に留まらず他県にも酪農後継者・関係者を輩出し酪農産業発展の役割を十分に果たされ、現在では応募学生の多くが一般家庭の子弟であり、特に女性の進出が目覚ましく将来への期待が育まれています。

おかやま酪農業協同組合におきましても、中国四国酪農大学校を卒業された方々には酪農経営は無論のこと、組合運営に携わる実に多くの地区役員や理事・監事の重い職責を担って頂いております。酪農家の中には後継者として二代目の就農だけでなく三代目となる酪大生も誕生しており、長い歴史の中には奥の深さも感じています。

さらに、酪大卒業生は、酪農経営にとって最も大切な存在の一つであるヘルパー事業の職員としても活躍され大きな役割を果たして頂きました。常に高度な先端技術や知識を要求される酪農にあって、中国四国酪農大学校の果たされてきた役割は高く評価されるものです。

一方で、県内や近県に於いてもメガファームの進出で、中小の家族酪農経営との格差が顕著となり、酪農後継者としての学生の減少と相まって、就農希望先も多様化し、自ら新たな酪農経営を目指す若者は極めて少なく、ヘルパーへの就農希望者も激減している事に憂うところでもあります。

酪農は若者たちの夢や希望を叶える産業であることに、かつて今も変わりはありません。私たちの組織や関係する全ての皆さんと力を合わせ、いかにその環境を整えるかが大きな課題であります。おかやま酪農業協同組合は中国四国酪農大学校と学生の皆さんへ、これからも最大限の支援を続け、さらに夢や希望のある酪農産業の構築に貢献したいと考えます。

中国四国酪農大学校におかれましては、設立50周年を期に更なる未来へ優秀な人材を育成して頂きます様お願い申し上げますと共に、ご尽力いただきました皆様のご健勝を祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

設立50周年に寄せて

岡山県農林水産総合センター

栗木 隆吉



中国四国酪農大学校設立50周年、誠におめでとうございます。

はじめに、これまで酪農大学校の発展に尽力された職員をはじめ、卒業生等、関係者の皆様に敬意を表します。酪農という実学に特化した大学校を、財団という形態で半世紀にわたり経営され、1,300人近い担い手を世に輩出してきたご苦勞は大変なものだったと推察します。

たと推察します。

この度、私どもに50周年記念誌への投稿のご依頼があり、講師経験が長いとのお話に納得してしまい、お受けする次第となりました。私は、これまで「乳肉加工学」という科目で講義と実習を担当してきました。初めて学生諸君の前に立ったのは平成7年ですから、途中3年間のブランクをはさんで、今年で講師歴18年になります。当初の学生諸君は元気で賑やかな印象で、実習等ではこちらも思わず力が入ることもありました。最近では当時と比べればおとなしくなったと感じていますが、一方で積極的に実習に取り組む学生が増え、良い意味で教える側のプレッシャーになっています。

さて、私が担当してきた「乳肉加工学」は前述のように実習が中心で、ガスや包丁、挽き肉機など、油断すると大けがに繋がるものも使用します。20人以上の学生を一度に相手にすると全体に目の届かないこともあります。努めて事故を起こさぬよう進めています。これまで「包丁で指を切る」、「白衣が燃える（焦げる）」、「実習室で転んで頭を打つ」、「実習の成果を食べすぎておなかを壊す」などのささやかな事故（無い方が良いでしょう）はありましたが、幸い、大したことなく何となく無事にやってきました。また、実習で作った加工品を試食した学生の「美味しい」顔に触れられることが、私にとっては担当を続ける励みになっています。

国内の酪農を取り巻く環境は厳しさを増していますが、こういう時代だからこそ酪農業を支える優れた人材の着実な育成・確保が重要であり、酪農大学校の役割は益々大きくなっていると考えます。将来に向かって酪農大学校のご活躍、ご発展を祈念するとともに、私なりに微力ながら協力していきたいと思う昨今です。

創立50周年に思う

公益財団法人中国四国酪農大学校

校長 山田 義和



中国四国各県及び兵庫県の10県で構成された財団法人中国四国酪農大学校が昭和40年11月に設立されて以来、今年で50周年を迎えることができました。半世紀に渡る伝統と歴史を刻むことができましたのも、国、岡山県を始め構成各県、地方競馬全国協会、さらには地元自治体並びに関係各位の暖かいご支援とご指導の賜であり、ここに深く感謝しますとともに厚くお礼申し上げます。

酪農大学校が目指してきた酪農実践教育の基本理念は、①経営感覚豊かで、確かな技術力を持った人材の育成、②酪農を通じて地域に貢献できる人材の育成、③協調性や高いコミュニケーション能力を持つ社会人としての基礎力を備えた人材の育成で、財団設立以降1,200名を超える卒業生を全国に送り出し、約83%が酪農後継者や牧場勤務及び畜産関係職場へ就職し、地域の中核としてリーダーシップを発揮し活躍されていることは、酪農大学校として誇りに感じているところです。

「継続は力なり」と言いますが、先輩諸氏が情熱を注いでこられた実践教育は着実に実を結んでいます。酪農の基本となる毎日の搾乳実習では、搾乳牛の健康管理、飼養管理、乳房炎乳の混入防止などの良質乳生産技術を教授し、学校で生産された生乳は、出荷先であるおかやま酪農業協同組合が、毎月2回実施している乳質検査で、細菌数及び体細胞数が20万/ml以下という基準を全てクリアしたもののみに与えられる「乳質優秀表彰」を8年連続で受賞するという快挙を成し遂げています。また、乳牛の改良を目的とした共進会においては、昨年の蒜山乳牛共進会において当大学校のジャージー種が念願のグランドチャンピオンを獲得し、本年4月に開催された第30回中国地区B&Wショーにおいて、中国各県、京都府、兵庫県から出品された130頭の中で初のグランドチャンピオンという栄誉に輝いております。さらに10月に北海道で開催された全日本ホルスタイン共進会に岡山県の代表として当大学校から4頭（ホルスタイン種2頭、ジャージー種2頭）が選抜され、大会では地元北海道勢が上位を独占する中、ジャージー種の未經産の部で優等賞2席を、経産の部で1等賞1席（セカンドベストアダー）を獲得し、全国にアピールすることができました。改良の成果は体型のみでなく、乳量もジャージー種で1日1頭当たり23kg、ホルスタイン種で34kgと大きく改善してきており、平成26年度出荷乳量1,112トンは、おかやま酪農業協同組合のなかで西の小結（8位）に位置づけられ、岡山県の酪農の中核的な存在となっています。







今後は農場HACCP制度の認証取得を行い、徹底した衛生管理のもとで良質乳を生産する技術、受精卵移植による高付加価値子牛の生産技術、6次産業化に対応した乳製品加工技術の充実などを図り、最先端の実践教育を行うことにより日本の酪農の牽引役として活躍できる人材の育成に職員一丸となって取り組む事としていますので、引き続きご指導、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

結びに当大学校の基礎を築かれ、育ててこられた先輩諸兄に心から敬意と感謝を申し上げますとともに、校外研修のため、学生を受け入れていただいている先進農家の皆様、全国で活躍されている卒業生の方々の益々のご発展とご健勝をお祈り申し上げます。













❖ 公益財団法人 中国四国酪農大 新旧役員等名簿

	役 職	氏 名	職 名	在任期間
(一社) 岡山県畜産協会	評議員	柴田 範彦	代表理事専務	H25. 4. 1～現在
中国生乳販売農業協同組合連合会	評議員	鍵山 信儀	代表理事常務	H25. 4. 1～現在
四国生乳販売農業協同組合連合会	評議員	菊川 時彦	代表理事常務	H25. 4. 1～現在
おかやま酪農農業協同組合	評議員	亀山 恭司	参 事	H25. 4. 1～現在
岡山県	代表理事・理事長	高橋 邦彰	農林水産部長	H25. 4. 1～H25. 4. 5
	代表理事・理事長	佐藤 一雄	農林水産部長	H25. 4. 5～H27. 4. 20
	代表理事・理事長	京 博司	農林水産部長	H27. 4. 20～現在
	代表理事・副理事長	上原 逸史	校長(岡山県OB)	H25. 4. 1～H25. 4. 5
	代表理事・副理事長	山田 義和	校長(岡山県OB)	H25. 4. 5～現在
	理 事	若田 茂	畜産課長	H25. 4. 1～H26. 4. 25
	理 事	中塚 陽二郎	畜産課長	H26. 4. 25～現在
兵庫県	理 事	山根 正男	畜産課長	H25. 4. 1～H26. 6. 20
	監 事	山根 正男	畜産課長	H26. 6. 20～H27. 4. 20
	監 事	芦田 義則	畜産課長	H27. 4. 20～現在
鳥取県	理 事	小松 弘明	畜産課長	H25. 4. 1～H26. 4. 25
	理 事	米田 和晃	畜産課長	H26. 4. 25～H26. 6. 20
	顧 問	米田 和晃	畜産課長	H26. 6. 20～H27. 2. 10
	顧 問	津森 宏	畜産課長	H27. 2. 10～現在
島根県	監 事	吉田 政昭	畜産振興課長	H25. 4. 1～H25. 4. 5
	監 事	生田 祐介	畜産振興室長	H25. 4. 5～H26. 6. 20
	顧 問	生田 祐介	畜産振興室長	H26. 6. 20～H27. 6. 12
	顧 問	田邊 裕彦	畜産課長	H27. 6. 12～現在
広島県	顧 問	西本 好宏	畜産課長	H25. 4. 1～H26. 6. 20
	理 事	西本 好宏	畜産課長	H26. 6. 20～現在
山口県	顧 問	作間 誠司	畜産振興課長	H25. 4. 1～H26. 6. 20
	理 事	水原 孝之	畜産振興課長	H26. 6. 20～現在
徳島県	理 事	今川 智久	畜産課長	H25. 4. 1～H27. 5. 15
	理 事	後藤 充宏	畜産振興課長	H27. 5. 15～現在
香川県	理 事	十川 政典	畜産課長	H25. 4. 1～H26. 4. 25
	理 事	秋山 正英	畜産課長	H26. 4. 25～H26. 6. 20
	監 事	秋山 正英	畜産課長	H26. 6. 20～現在
愛媛県	監 事	丹 幸大	畜産課長	H25. 4. 1～H25. 4. 5
	監 事	中谷 哲哉	畜産課長	H25. 4. 5～H26. 6. 20
	顧 問	中谷 哲哉	畜産課長	H26. 6. 20～H27. 6. 12
	顧 問	二宮 幸誠	畜産課長	H27. 6. 12～現在
高知県	顧 問	長崎 浩	畜産振興課長	H25. 4. 1～H26. 6. 20
	理 事	長崎 浩	畜産振興課長	H26. 6. 20～現在
中国四国農政局	顧 問	國弘 実	局 長	H25. 4. 1～H26. 6. 20
	顧 問	田野井 雅彦	局 長	H26. 6. 20～H27. 2. 10
	顧 問	仲家 修一	局 長	H27. 2. 10～現在

歴代校長・副校長（次長）

校 長				
<p>(県立) 初代</p>  <p>惣津 律士 (S36.12 ~ 38.3)</p>	<p>(財団) 初代</p>  <p>蔵知 毅 (S38.4 ~ 42.5)</p>	<p>2代</p>  <p>花田 時太 (S42.5 ~ 48.3)</p>	<p>3代</p>  <p>金島 卓司 (S48.4 ~ 49.3)</p>	<p>4代</p>  <p>田淵 志郎 (S49.4 ~ 51.4)</p>
副 校 長				
				 <p>永井 仁 (S48.4 ~ 53.3)</p>

校 長				
<p>5代</p>  <p>信江 茂 (S51.6 ~ 53.3)</p>	<p>6代</p>  <p>花房 清人 (S53.4 ~ 54.7)</p>	<p>7代</p>  <p>三宅 茂 (S54.7 ~ 55.12)</p>	<p>8代</p>  <p>宮本 宣明 (S55.12 ~ 57.3)</p>	<p>9代</p>  <p>三村 剛 (S57.4 ~ 59.3)</p>
副 校 長			次 長	
		 <p>竹内 秀雄 (S53.4 ~ 55.3)</p>	 <p>服部 剛 (S55.4 ~ 57.3)</p>	 <p>日笠 重雄 (S57.4 ~ 58.3)</p>

校 長						
<p>10代</p>  <p>石田 正之 (S59.4 ~ H元.3)</p>	<p>11代</p>  <p>植月 昌彦 (H元.4 ~ 3.3)</p>	<p>12代</p>  <p>雛川 信昭 (H3.4 ~ 6.3)</p>	<p>13代</p>  <p>原 真一 (H6.4 ~ 7.3)</p>	<p>14代</p>  <p>古好 秀男 (H7.4 ~ 10.3)</p>		
次 長						
 <p>石原 健 (S58.4 ~ 61.3)</p>	 <p>植木富士男 (S61.4 ~ 63.4)</p>	 <p>浦上 雅道 (S63.5 ~ H3.3)</p>	 <p>岡本 宗三 (H3.4 ~ 5.3)</p>	 <p>松田 忠博 (H5.4 ~ 6.3)</p>	 <p>有富 敬典 (H6.4 ~ 8.3)</p>	 <p>山下 稔 (H8.4 ~ 10.3)</p>

校 長			
<p>15代</p>  <p>神原 啓 (H10.4 ~ 11.3)</p>	<p>16代</p>  <p>小福田満郎 (H11.4 ~ 12.3)</p>	<p>17代</p>  <p>古好 秀男 (H12.4 ~ 17.3)</p>	<p>18代</p>  <p>有富 敬典 (H17.4 ~ 18.10)</p>
次 長		副 校 長	
 <p>小福田満郎 (H10.4 ~ 11.3)</p>	 <p>高山 介作 (H11.4 ~ 14.3)</p>	 <p>中山 敏之 (H14.4 ~ 16.3)</p>	 <p>西家 純一 (H16.4 ~ 18.3)</p>

校 長			
19代  金山 聖 (H18.11 ~ 19.3)	20代  上原 逸史 (H19.4 ~ 25.4)		21代  山田 義和 (H25.4 ~ 現在)
副 校 長			
 森本 博之 (H18.4 ~ 21.3)	 谷田 重遠 (H21.4 ~ 23.3)	 広金 弘史 (H23.4 ~ 25.3)	 岸戸 武士 (H25.4 ~ 現在)

岡山県立酪農大学校

氏 名	職 名	在任期間
三木 行治	岡 山 県 知 事	S36.12.1 ~ S39.9.21
加藤 武徳	岡 山 県 知 事	S39.11.12 ~ S42.3.31

財団法人中国四国酪農大学校 歴代理事長名簿

氏 名	職 名	在任期間
加藤 武徳	岡 山 県 知 事	S40.11.18 ~ S47.11.12
長野 士郎	岡 山 県 知 事	S47.11.12 ~ H8.11.12
石井 正弘	岡 山 県 知 事	H8.11.12 ~ H9.8.9
野平 匡邦	岡 山 県 副 知 事	H9.8.9 ~ H11.4.1
山口 勝己	岡 山 県 副 知 事	H11.4.1 ~ H16.6.7
森 義郎	岡山県農林水産部長	H16.6.7 ~ H17.5.30
藤原 師仁	岡山県農林水産部長	H17.5.30 ~ H18.6.6
古矢 博通	岡山県農林水産部長	H18.6.7 ~ H20.6.6
杉山 誠一	岡山県農林水産部長	H20.6.6 ~ H21.6.5
大森 弘介	岡山県農林水産部長	H21.6.5 ~ H23.6.6
足羽 憲治	岡山県農林水産部長	H23.6.6 ~ H24.6.5
高橋 邦彰	岡山県農林水産部長	H24.6.5 ~ H25.3.31

回 想 録

20年誌から引用

県立酪農大学校創立時の思い出の記



花尾省治

(昭和36年12月～38年3月教務課長)

岡山県立酪農大学校創立の思い出について述べたいと思います。戦後の蒜山は、冬は積雪にうもれ、夏になると砂塵を吹き上げる曲がりくねった山道を小型バスにゆられながら長い時間をかけてやっとのおもいで、たどり着いたものでした。当時、生活をささえるものは、米・黒牛・馬・タバコ位のもので、わびしい寒村で、従って農家経済は、低いものでした。この蒜山を陽のあたる場所にしようと、偉大な時の指導者・故三木知事と情熱の人・故惣津畜産課長のお二人が国を動かし、ジャージー牛導入の指定にこぎつけたのでした。昭和29年秋、川上・八束・中和・二川・湯原の5ヵ町村に黒牛しか見たことがなかった村に、可愛いバンビのような乳牛が導入されました。続いて、昭和30年12月、1市15ヵ町村が「美作集約酪農」国の指定となって「乳の流れる里」蒜山高原建設に向けて挙県一致体制がひかれ、指導体制の整備、営農改善、飼養管理、5千ヘクタールに及ぶ原野の草地造成に向けて（美作地域大規模草地改良事業）トラクターのエンジンの響きも高く草原の開墾が進められました。大規模草地は34年秋から調査が始められ、事業実施は36年からでした。

ところで県立酪農大学校の建設は、三木県政「酪農振興」の一環として昭和36年12月1日の開校となり、初代校長には本県の酪農建設に情熱を燃やされた惣津律士農林部次長に白羽の矢が立てられ、就任されました。入学式は12月1日午前9時から県庁9階ホールで、三木知事をはじめ、30名の第1期生（うち、県内26名）、関係者百数十名が出席して行われました。知事からは「酪農に寄せる県民の期待は大きい。今後も酪農振興には力をいれてゆきたい。惣津校長のもとにより校風を作ってほしい」と、熱のこもった告示がありました。続いて知事の手から惣津校長の手にしっかりと校旗が手渡されました。更に入学生の宣誓署名が行われ、厳粛のうちに希望に満ちた入学式典は終わりました。その時の情景は、今も胸に焼きついています。

或る日突然、部長室から呼び出しがかかり、当時、部長・次長は同室で、お二人の前で「お前、惣津校長の補佐役として酪大にゆかぬか」と言われ、一時ためらったものの惣津校長の下でのご奉公であり了承いたしました。

新入生の授業は12月10日から3月末までが第1期となっていました。蒜山原に建設中の校舎ができるまでの間、津山市の県立酪農試験場の一部を間借りして1期生4ヶ月の授業実習を行いました。専任職としては私の他に、三秋尚飼料研究主任、事務担当は小谷哲夫主事補だけのこじんまりしたメンバーでのスタートでした。2期生から本格的に蒜山の新校舎で授業実施となりました。

思い出の2～3を取りあげてみますと、①新校舎移転の年は古老もびっくりする程の30年来にない程の大雪に見舞われ、一時交通麻痺の状態です。食糧不足となり、2m余の雪を除いてのカンラン掘り出し、牛の糞不足で近くの農家の糞を買い取り、慣れないスキーでの糞運び、②今、亭々と天に向かって伸びているポプラ並木は、職員の方達が食前作業で苗木をスコップの長さと同じ深さに掘り、1本1本丁寧に汗流して植えたもの

です。③三木が原での種まきは、学生・先生が横一列に並び、縄を適當の間隔に各自の腰に結び、号令一下一斉に前進、種を散布しました。④「土地の譲り受け交渉」学校入口の畑はタバコ耕作畑の一等地でしたが、これを求めて入口から学校の土地にするため、三秋主任が夜毎交渉を続け、やっと買収の手打ちとなりました。数々の先生方の苦心話はずきません。

「歴史は、人によって作られ、人は教育による」といわれます。初代惣津校長は、よき行政官であったと同時に、立派な教育者でした。その高邁な人格、先見性、情熱の持ち主だった校長の人間像に先生も学生も心ひかれ、両者が混然一体となって校風づくりに励みました。惣津校長によって点火された輝かしい聖火を永遠に光り輝くものとしてほしいと願って止みません。終わりに一層の発展を祈ります。

20年誌から引用

これからの酪農



岡山県畜産会長
岡山県酪連会長 **惣津 律士**
(昭和36年12月～38年3月県立初代校長)

最近の酪農ムードにつられて、簡単に酪農経営がやれるように思う人が案外多いのではなかろうか。一般に酪農家の経営知識が乏しいとは、よく言われる言葉である。しかし経営戦略のみで、乳牛は十分な能力を発揮してくれるはずはない。酪農をやる上に必要なすぐれた知識と技術と土性骨を酪農家が身につけているかどうかによって、これからの酪農の勝負が決まるのではなかろうか。

貿易自由化になると「酪農はペシャンコだ」とはよく聞かされる言葉である。そして酪農家は限りない不安をいだいている。しかし私は決して貿易自由化を恐れる必要はないと思う。日本は日本なりの特色ある酪農を樹立すべきである。このためにも国も県も、団体も乳業者も、同一方向に向かって研鑽、努力すべきである。地域の立地条件を最高度に活用して、われわれ酪農人の共同の力で創造した酪農は、やがて自由化のアラシの中で大きい発言の地位を占めるであろうことを私たちは期待して努力すべきである。

私は一昨年12月に蒜山に設立された県立の酪農大学の初代責任者として赴任して以来、将来酪農経営者たらんと志す若人たちと起居をともにし、昼も夜も酪農の前途を語り合う機会に恵まれた事は、私の生涯を通じて最良の年であったと思っている。

今でこそ人づくりという言葉が使われているが、当時は口にする人はなかった。これからの酪農に近代的なセンスと技術と知識をもった青年が必要であることを洞察された三木知事の偉大さは、現地で研修が進められるにつれてひしひしと私は身に感じたのである。

「立派な校風を作ってくれ」と一昨年12月の開校式当日に知事が訓示した言葉を、私たちは深く胸にきざんで「酪農の久遠の城」の建設にまい進したものである。

筋金の入った酪農人の造成が、徐々に蒜山の一角に誕生したのである。



寮 歌

作詞 惣津 律士

- 一、緑したたる陽春に
 ジャージ遊ぶ蒜山の
 文化の香りや高く
 学園したいて我は来ぬ
- 二、流れは清し旭川
 北斗の星座仰ぎつつ
 固き決意の若人は
 誇りと栄を歌うなり
- 三、錦繡の影映ゆるとき
 偲ぶや故郷の秋の曲
 我感傷の夢追いぬ
 心理の道はいとけわし
- 四、神秘の白衣蛭が蜂
 無限の光ほほえみぬ
 われらが築きし酪農の
 久遠の城を来り見よ

私は学生におりにふれて「君たちは私たちの教えることを通じて、物の考え方、見方を精進する必要がある。うんと本を読み、うんと建設的なディスカッションをして疑問を持つようにせよ。そこに進歩があるんだ」と話した。蒜山のジャージー農家で立派な成績をあげておられる方々は、すぐれた考え方をしている。農業教育が今日ほど重要性をもっている時はないと私は思っている。

しかし案外、従来の講習施設に人が集まりにくいのはどうしたことか。農村青年諸君が都市へ行く世相は十分に承知できるけれども、教育施設の内容に魅力が乏しいのではないか。今日の農業施策はとかく行政が先行して、教育とか試験研究はあとからトボトボ歩いているせいである。これらの整備とか拡充になるとあとまわしになるのが通例である。農業構造改善事業があすの日本農業を約束するのであるとすれば、よろしく、試験研究機関と教育機関に為政者はうんと配慮すべきであろう。

”酪農は成長株だ“と時代の寵児のようにいわれ、そのムードは華やかである。単行本も雑誌も、もうかる酪農はこうすべきだとか、何ヶタ農業は酪農からとか、盛んにとり上げている。しかし、そうした表面的な派手さに目をうばわれ、立派な経営はすぐれた知識と技術によってのみ実現できるという簡単な公式を忘れてはならない。アメリカでは、成功する農家は立派な技術者であり、よき経営者であり、そしてすぐれたセールスマンであるといわれているのだ。

酪農経営者は決してなまやさしいものではない。乳牛は海外から導入された。日本的に乳牛そのものを改良する必要もあるし、飼料作物の研究、自給率の向上と、残された問題はたくさんある。しかし、どうしてもやりとげなければならないことであるとするならば、われわれの英知と根気よい努力によって、いままでの外国のマネに過ぎなかった酪農から脱皮し、日本の風土に合った、農家経営に調和した独自の酪農を築き上げることが、あすの輝かしい酪農をつくりあげるのだと強調したいのである。

20年誌から引用

「ある農林部長のメモ」から 苦心惨胆中国四国酪農大学校の発起

元岡山県農林部長 山下 肅郎

農業教育、農業後継者養成、と一口にいうけれども、ノート鉛筆、鋤に鎌の時代はいざ知らず、今日の近代化された高水準の施設を揃えて、若い人達をアピールするような教育をしようとするなら大変な費用がかかる。一つの事例を示してみよう。

岡山県には、他府県に類を見ない岡山県立酪農大学校がある。

これは三木知事の「南に水島工業地帯、北に乳の流れる郷を」という理想主義計画の一環として、乳の流れる郷作りの基幹として、創設されたものである。

蒜山原野は、日本原（勝田郡奈義町）とならんで帝国陸軍の演習地であり、ここに住む人達は冷害とたたかいつつ、水田をつくり、馬と牛を飼育して貧しい生活に耐えていた。終戦後、軍用地は、農林省の開拓財産になり、開拓に転用され、入殖者が入って来た。また、一部は地元の採草地に払い下げられた。

昭和30年この地が酪振法にもとづき集約酪農地域に編入され、国の融資によってオーストラリア、ニュージーランドから1,175頭のジャージー種が入れられた。

県としても、農業史上、これは一つのエポックメイキングな事業であると同時に、貧しい農家が期待をかけて求めた牛だけに、失敗させてはならない。そこで、この地に酪農指導所を置き、技術指導は勿論、人工授精、家畜診療所一切の世話をすることになった。これが酪農大学校の種となった。

酪農大学校は36年2月県議会の議決を経て建設に着手し、12月に酪農試験場を借りて開校し、37年4月から蒜山の建築が完了したので移転した。

私が改めて申すまでもなく、この種の県営の、農林部が行う専門教育施設（教育関係ではないということ）としては、他に類例を見ない規模のものといつてよい。それから4年を経た今日においても、随分立派な種畜場や酪農試験場は出来ているが、農林部の独立した酪農教育施設としては、これだけの規模のものは北海道を除いて全国にないといつてよかろう。

ところがこれだけの施設をしても、決して十分ではない。十分どころか、足りないことが一杯である。

第一は施設関係である。

寄宿舎は4人1部屋だが、長期寮生活ではどうも無理である。

トラクター（借り物）、カッター等は揃えてあるが、ハイコンディショナー、ハイベラー、肥料散布機、大型播種機、ランドレベラー等がない。生徒教材用と実際の運用と、少なくとも複数の機械を必要とする。

図書室、娯楽教養室が足りない。

第二は先生関係で、山村僻地のため、子弟教育に不便なので、殆どが単身赴任で、土帰月来先生ばかりである。

第三は最も主要なことであるが、ここで生徒は何を学ぶかということである。どうして草をつくるか、どうして乾草をつくるか、牛の飼料をどうして調整するか。そんなことは酪農大学校でなくても、酪農試験場で十分出来るはずである。講義も県の職員の講義だから、酪農大学校においてはじめて聞けるというものでもない。そのところを、つきつめて考えると、酪農大学校は他県に類を見ない規模を持つ特異な施設であっても、なお中途半端なもので、「酪農大学校なればこそ」というものに欠けているということが出来る。

岡山県の酪農大学校は、このような意味で危機に逢着している。ましてや、中四国各県においても同様であろうことは、推測に難くない。

しかしこれを少しでも魅力のある教育の場に再建するには、なお、一億円を越える投資を必要とする。こんなことを、各県それぞれが設置するということは、およそナンセンスである。非経済もはなはだしい。

そこで中四国農政局とも相談して、中四国酪農大学校に編成替えをする。そのために地方競馬全国協会から、地域開発のための補助金を貰ってくる。中四国9県に兵庫県を加えて、財団法人を設立して運営する。かような趣旨で中四国農林部長会議、同畜産課長会議に話を持ちかけたが、各県ともに、小さいながら、一応畜産技

術者の養成施設はあって、それが施設不十分で運営もうまく行っていない。生徒も思うように集まらないということで、いずれもなやみの種となっている最中である。患部は切ればよいというのは正論であるが、行政ともなると在るものを切ることは容易ではない。ましてや、今の今までその施設整備で、予算を要求していた農林部長にとっては、岡山県に共同施設をつくって、中四国一本にし、立派な酪農大学をつくるから、もうこれは廃止するとか、予算はそちらに出資する方に切り替えてくれとは、なかなか切り出し難い。岡山県に対し競争意識（単に農村のみのことでない）の強い県においてはなおさらで、その辺が反対の中心になる。

それやこれやで、農林部長会議だけでは決め難いから、知事会議に持ち出してくれということになり、県議会議長会（40年2月12日）、知事会議（40年1月11日）に議題として提出することになった。もっとも、これは中国だけで四国各県の知事さんへ依命によって、四国行脚をして依頼をして廻った。

会議をする度に、岡山県が折れて、（中略）職員は当面の間岡山県が出向させる、各県の出資は一応10万円とする（後に100万円となる）、というようなことで漸く話が軌道にのって来た。

しかし次の問題が控えている。ほんとうに立派な中四国酪農大学校の設立である。私が県を去るに当たって、気がかりなことのひとつになってしまった。

30年誌から引用

創立30周年に寄せて



家畜改良事業団岡山種雄牛センター

永井 仁

（昭和48年4月～昭和53年3月副校長）

財団法人中国四国酪農大学校創立30周年心からお祝い申し上げます。

これに花を添えて、関係したもの一同が、熱望してやまなかった素晴らしい本館の落成、重ね重ねおめでとうございます。

私は県職員の最後、昭和48年4月から昭和53年3月まで、財団になって丁度10年を挟んで、8期から12期の皆さんと、一緒の釜の飯を食べたのが、最も楽しく、充実した期間でした。

一口に30年と言いますが、ここまで来るには多くの関係者、関係機関のかたがたの、大変な努力と協力が有ったことを忘れてはならないと思います。

私事で恐縮ですが、私は県在職25年弱の間、ほぼ酪農一筋でございましたので、学校の沿革にないエピソードの一部を紹介してお祝いの言葉に代えたいと思います。

岡山県の酪農の歴史は古く、大正11年には、西大寺に旭東練乳と言う工場が出来た位盛んでしたが、岡山県は従来から和牛と養鶏の王国、酪農の入り込む隙間はありませんでした。

これにスポットを当てられたのが、桃太郎知事として親しまれた故三木行治知事と、学校の正門前に遺徳を偲んで建てられている胸像の主、故惣津律士畜産課長のコンビが生まれた昭和26年からでした。

昭和28年、酪農振興法ができるや、津山市を中心に県北一帯、特に酪農処女地のここ蒜山にジャージー牛を導入したのを手始めに、昭和34年までに県内を3つの集約酪農地域の指定を受けて、組織的な酪農振興が図られることになりました。

ところが10年間お世話戴いた、偉大な故惣畜産課長が、突然技術者としては異例の、監査事務局長に栄転され、課員一同父親を失ったような感じで茫然としました。

しかし在任1年で農林部次長に復帰され、一同ほっとしましたが、それは三木知事から、『惣津君、牛を作る体制は出来たが、これを飼う人作りが出来ていないではないか、ありきたりではない、酪農経営者を育てる学校を作れ』、との特命があつて、現在の全国でも希な酪農大学の基礎作りが始まりました。

惣津次長の頭には、デンマークの国民高等学校のように、農閑期に学ぶ学校を作りたいと言う構想がありました。

当時酪農経営者養成に、ユニークな教育をされていたのが、北海道の酪農学園大学で、早速視察に行かれました。そのとき若輩の私に「学校が出来たら君を連れて行くから手伝いをせよ」とのことで、北海道へもお供しました。

酪農学園では非常に温かく迎えて頂き、『学校を作るのは簡単だが、特色のある教育をしようとすればするほど、学生募集に苦勞する。安定するまで10年はかかる』とのアドバイスは今も頭に残っています。

そして学生募集を4月、8月、12月の年3回とし、就学期間は3年間とする。

在学期間の4ヶ月以外は、自宅等で研修することとし、昭和36年12月1日、第1期生30名の入学式が県庁9階ホールで、三木知事を迎え希望と、熱気に満ちて行われ、関係者は大感激でした。

ユニークな学制のため、県単独で経営するには経費の負担が重く、また学生募集の関係から見直しの機運が高まり、加藤知事、山下農林部長、出口畜産課長、蔵知校長の時代に、中国四国9県に兵庫県を加えて、財団法人に衣替えして運営するという構想が纏まりました。

各県の協力を得るには大変なご努力だったようですが、昭和40年11月10日、現在の財団法人中国四国酪農大学が誕生し、学生募集は4月、就学期間は2ヶ年に改められ、県立酪農大学は昭和42年3月、4期生の卒業でその幕を閉じました。

財団法人中国四国酪農大学は、各県から100万円の出損金を出して貰い（各県の事情で実際の払い込みは10万円）、施設整備には、地方競馬全国協会から多大の補助金を頂いて、当時としては近代的に学校が出来上がり、酪農のムードも良かったので、学生募集も順調でした。

さきに私は惣津校長のお供をして、県立酪農大学に行くことになっていましたが、最終的に後方で支援せよとのことで、畜産課に残ることになりました。

昭和48年4月学校に赴任して感じたことは、学生が個性豊かで、純真でやる気のある好青年が揃っていることでした。

また訪れてくる卒業生が、立派な経営者に成長して地域で頑張っていることでした。

そこで今後の学生の為により良い施設にすることが我々の使命だと考え、創立10年の節目でもあり、施設整備5ヶ年計画を樹立し、岡山県、中国四国農政局、地方競馬全国協会の大変なご協力を頂いて、施設を一新することが出来ました。

特に地方競馬全国協会にはご無理を申しましたが、その時『収容施設に余裕があるときは構成県外からの学

生も受け入れる』との条件が示され、構成県のご理解を頂いて、全国に門戸を開放し、広く学生が集まることになりました。

懸案であった出損金も、構成各県のご理解で、100万円の満額にして頂いたのも感激でした。

最大の懸案の学校のシンボル本館も作って頂きました。

わが国の酪農は、我々酪農大学卒業生が担うんだという気概を持って頑張りましょう。



(昭和37年5月4日付、山陽新聞より)

酪農王国への先兵 学科、実習、夢多い寮生活 現地ルポ

冬のころもをようやくぬぎはじめた“上蒜山”の南のすそ野が切れたところ、旭川の清流を渡ると赤い屋根のしょうしゃな建て物が見える。4月から第二期生を迎えて開校したばかりの岡山県立酪農大学校（真庭郡川上村）だが、ここでは24人（定員30人）の学生が惣津律士校長以下16人の教職員、それに乳牛（ジャージー）12頭をはじめ和牛、ブタなどの動物たちといっしょに元気な学生生活を送っている。

まず食前実習から

昭和45年に県下の乳牛を14万6千頭にし、岡山を酪農王国にしようという県の酪農振興策のにない手を養成する—これが同校設立のねらいだが、建物はやっと3月末に講堂、学生寮、食堂、浴場など3むねができあがったばかり、ことしは研究室や教職員室になる本館のほか畜舎、たい肥舎、職員宿舎などを建設。明年度は30人収容の学生寮、大農具を収容する建物、畜舎などを整備する方針で、3年間に約一億円をつぎ込む計画を立てているので、いまのところは大学校というにはいささかさびしすぎるが、2、3年先では面目を一新することだろう。ところで学校での一日だが午前6時50分、あ

たりの“しじま”を破って響きわたるサイレンではじまる。起床と同時に学生たちは7時から食前実習。乳をしぼったり、エサをやったり、一時間の実習で朝の食事はめっぽううまい。8時40分から午前中の講義がはじまる。15分間の休憩をはさんで正午まで続くが、時間割りをのぞくと畜政論、酪農経営学、飼料作物学などとむずかしい専門学科がずらりと並んでいる。教科書は岡大畜産科とほとんど同じで講義内容は普通の大学の農学部レベルだ。午後は一時から原則として実習。一班5人ずつで実習班5班を編成し、乳牛飼育、飼料、家畜衛生の各研究室での実習。そのほか農場整備、牧野造成などの建設実習、学生が希望する選択実習（土曜日の午後や日曜日）などがある。5時夕食。その後は当番が牛の世話をするだけでまったくの自由時間。昼間の講義の整理をするもの、入浴するもの、寮のあちこちからどっと笑い声がこぼれるのもこのときだ。そして10時の消灯で一日の活動が終わり、人も、牛も、建て物も“蒜山三座”とともに深いねむりにつく。

問題は“冬将軍”

惣津校長に開校間もない酪大の運営について感想をきいてみると「教材不足などはおおい消してゆくのでそれほど苦にならないが、問題は冬将軍だ」という。ことしは一期生（12月－3月）は津山の仮校舎での勉強だったので、越冬の経験はないわけだが、蒜山の冬は予想以上にきびしいらしい。12月から3月までは積雪1メートルを超える雪にすっぽり包まれ、交通は途だえてしまうし、屋外実習もまず無理。となると講義をきいたり、それをすぐ実習で身につける酪大独特の教育効果も半減してしまうわけだ。県下でも最多雨地帯といわれ、年間3千ミリを越える降雨も困るには困るが、冬の大雪とどう取り組んでいくか。設立にあたって県議会でも「大学の立地条件としては不相当だ」との意見はあったが「雪にとどぎされていて病人が出たらどうするか。それ一つを考えてみても頭が痛いですよ」と惣津校長は早くもことしの冬を苦しめた口ぶり。

明るい学生の表情

だがこうした“あい路”はあるにせよ、希望の多い土地での夢多い学生生活ではある。蒜山山ろく一帯は昨年から大規模草地造成事業にかかっており、“不毛の地”といわれた黒ぼこ地帯が広大な緑の牧野に生まれかわる日も遠くないし、数年たてばジャージーの飼育頭数もこのあたりで1300頭に達する。片や、蒜山一帯は念願の国立公園に編入され、国民休暇村も建設される。雄大な自然のふところに抱かれて、学生たちの表情は限りなく明るかった。

酪大での思い出



(財)14期生 妹尾 始
(旧姓：大山)

創立50周年おめでとうございます。私が酪大に足を踏み入れてから、早37年が過ぎ、月日の流れにどぎまぎしているところです。

当時は瀬戸大橋がまだ無く、四国から汽車、フェリー、バスを乗り継ぎやっとの思いでたどり着いた蒜山でした。蒜山は西日本の軽井沢と言われるだけあり、蒜山高原の爽快

さ、建ち並ぶ別荘、大きな目を輝かせながら草を食むジャージー等に心を癒されました。

酪大での思い出の一つは長い夜です。酪大の夕食時間は早く、夜の時間をいつも持て余していました。しかし生活に慣れてくると、お酒を片手に酪農談義に明け暮れたり、倉吉に出かけパチンコ店をめぐったり、体育館で卓球やバレーボールをしたりしました。バレーボールでは柴田先生の指導の下練習に打ち込み、蒜山の成年チームと試合をしたりもして有意義な時間を過ごしていました。

また酪大には見たこともないロータリーパーラーや大型トラクター、ハーベスター等々機械がたくさんあり胸をワクワクさせていましたが、実際はトウモロコシを鎌で刈り、両手で抱えてはハーベスターに投げ入れて・・・こんなに良い機械があるのになんで～？とっていました。すると皆が競うようにトウモロコシを投げ入れだしハーベスターをつまらせては休み・・・穏やかな有富先生に「お～い！今日中に終わらんで～！」とよく言われたものです。

校外実習では静岡、北海道に行きました。北海道では広大な大地に見とれている暇もなく汗を流していました。トウモロコシの間を背負いの手押しポンプで除草剤散布、収穫シーズンには牛舎の仕事を早々に終わらせて、畑のあちらこちらに転がっているコンパクトベールをトラックに6段7段と投げ込み、持ち帰っては倉庫に山積みにする日々が続きました。今思うと、体がようもったなあ～と感心します。

現在、私は岡山市北区建部町の山の上で成牛110頭、育成牛55頭(内預託35頭)を飼っています。当時お世話になった先生方には今でもご指導いただき感謝しています。先生方、同窓生の皆様方に、またいつかどこかで再会できるのを楽しみにしています。そしてOB関係者、関係機関のみなさまのご健康とご活躍をご祈念申し上げます。

牛乳は健康のみなもと 健康は牛乳から！

第14回全日本ホルスタイン共進会
北海道大会にH種1頭出品



ヒールクレスト デイストライ クレツト
(第11部 優等賞2席)

酪農さいこー！！

(助)18期生 **岸本美加**
(旧姓：鳥越)



娘(第49期生
岸本瀬奈)と一緒に

中国四国酪農大学校の創立50周年、おめでとうございます。

私の母の実家には牛がいて、子供のころから“将来は牛飼いをしたい”
と思っていたので、30数年前酪大を受験しました。

「牛は好きかね?」、「はい!!」で入学試験を通り、酪大に入学。

でも、牛に関して知っていることといえば、乳牛は白黒で和牛は肉牛。
角があって乳は4本、くらいでした。

牛を見たことはあっても触るのは初めてで、搾乳時に乳を拭くのも
こわごわ。へっぴり腰での乳搾りを、指導の先輩方に笑われていました。

それでも半年の間に作業にも慣れ、牛のことも少しわかってきました。

その後、1年間の校内・校外研修。

大分県と県内津山市の計4戸の酪農家にお世話になり、色々迷惑も
かけましたが、得難い体験ができました。

卒業後は実習・乳量検定員を経て、酪大の13期生だった先輩と結婚しました。授かった3人の子供達も今
では立派に成長し、みな酪農に従事しています。

結婚当時40頭だった牛は200頭に増え、従業員を抱えるまでになりました。平成26年には「株式会社
ミルクファクトリーキシモト」として法人化し、日々酪農にいそしんでいます。

幼いころ夢見た“北海道で牛飼いになる”とはちょっと違うけど、毎日牛まみれの生活。「酪農さいこー!!」
です。

第14回全日本ホルスタイン共進会北海道大会にH種3頭出品



グランデール レイチエル テインテイン
(第2部 1等賞8席)



MFK カメレオン S ショウシヨ ET
(第3部 1等賞5席)



ノースフィールド ローソン リツキー
(第13部 1等賞8席)

酪農大学校 創立50周年に寄せて



(財)36期生 **孝 本 智 子**
(旧姓：宮 脇)

創立50周年おめでとうございます。

私が酪農大学校に入学したのは、今から14年前のことです。非農家であった私は、牧場での実習をこなすだけで精一杯でしたが、目にするものすべてが新鮮で、本当に楽しく充実した日々を過ごすことが出来ました。また、同じ目標を持つ良い友人達にも恵まれ、寮で毎晩語り明かしたことが、昨日のこのように思い出されます。酪大で過ごした2年間は、色々な経験ができ、たくさんの方と出会うことのできた、かけがえのない2年間でした。

卒業後、牧場勤務を経て、現在は、岡山県吉備中央町の肉用牛繁殖農家（酪大32期卒業生）に嫁ぎ、100頭（成牛60頭、子牛40頭）の和牛を飼育しています。酪大在学中は何度練習しても上手に乗れなかったトラクターも、ようやく乗りこなせるようになりました。牛舎周りの草刈りは大好きで、主人に刈り払い機の歯を磨いでもらい、日々汗をながし頑張っています。二人の娘も、毎日牛舎に来て時々手伝ってくれるようになりました。これからも、家族で力を合わせ頑張っていこうと思っています。

酪農大学校50周年に寄せて



(財)42期生 **江 淵 辰 哉**

中国四国酪農大学校創立50周年、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私は、祖父母が入植した高知県安田町で酪農を営んでいます。広大な土地を自ら開墾し畜舎を増築するなど、逞しい父の姿を幼い頃から見ていた私は、その姿に憧れ、中学卒業後すぐに家業を継ぐつもりでいました。しかし、高校に進学すべきだと家族に説得され、地元の農業高校畜産科へ通いながら家の手伝いをする毎日でした。高校在学中も「自営をしたい」という思いは強く心の中に残ったままでしたが、母の「今しかできないことをやってほしい。」というひと言に押され、中国四国酪農大学校への進学を決めました。

酪農大学校では、実習を主体とした実践的なカリキュラムを消化することにより、現場で使える知識・技術が身につきました。また、在学中に酪農業に必要な免許や資格が取れたことも今の自分には大変役に立っています。さらに、日本各地に酪農家を目指す同年代の友人ができたことも私にとって大きな収穫であり、酪大に進学してよかったと感じています。

卒業後は地元に戻り、実家の牧場を手伝いながら酪農ヘルパーとして働き、近隣農家の方たちから多くのこ

とを学びました。また、高知県では酪農大学の歴代の卒業生たちが地元の酪農を牽引しており、面倒見の良い先輩方がいろいろと相談に乗ってくれるので非常に心強いです。

仲間に恵まれ、順調なスタートを切った私の酪農人生ですが、そのわずか2年後、私が22歳の時に父が他界しました。父から機械や道具の使い方や酪農のノウハウを学ぶ間もなく、ただただ残念でなりません。母と二人、家族が守ってきたこの土地で父の遺志を継いで酪農を頑張っていこうと決意しました。

あれから5年。今春には念願の新牛舎も完成し、飼養頭数も徐々に増えてきました。飼料へのこだわりや給与方法、効率的かつ牛に優しい搾乳方法など、学ぶべきことはまだまだたくさんありますが、酪農大学で学んだことを活かし、目標を掲げて一歩ずつ前へ進んでいきたいと思っています。私の目標は「地域に根差した酪農経営」です。酪農大学の教育理念にもあるように、酪農という産業を通して、過疎化・高齢化が進むふるさとの発展に寄与したいと考えています。そのために自分にできることは何かを考え、何事にも活動的に取り組むことで地域を支えていく原動力になれるよう、より一層努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、酪農大学の益々のご発展をお祈りいたします。

酪農大学を卒業して

(財)43期生 長崎清子



中国四国酪農大学創立50周年おめでとうございます。

私が卒業して丸6年が経ちました。原稿の依頼があった時は、私なんかでよいのかという気持ちが多くありましたが、せっかく頂いたお話なので私が今仕事を通して感じていることなどを書かせて頂きたいと思っています。

私は岡山県の商業高校出身で、学校生活がスタートした当初、農業高校出身の同期との知識と経験の差に落胆していた事も多々ありました。勉強については、自分の努力不足が原因でしたが……。でも、まだ19歳の子供。非農家出身ということもあり、あまり深くは考えず学校生活を送っていました。そして校外研修。3か所全て牧場体験などを行っている農家を選びました。そこで初めて搾乳体験や哺乳体験をし、研修終了後はそういった牧場で働きたいと思うようになりましたが、最後の最後まで就職先が見つからず、この時もあまり深くは考えず現在働いている滋賀県の牧場への就職を決めました。

働き始めてから、学生時代にもっときちんと勉強したことを自分の身にいられておくべきだったと心から思いました。作業はこなせる。しかし牛をしっかりと見て、変化や異変に気付き、対処するというのが難しい。それが出来なければ最悪の事態にだってなり兼ねない。当たり前の事ですが、酪農という仕事にとってすごく大事なこと。自分はたかが従業員。でもそんなことは牛には関係ない。学生気分を早く抜かなければ！と初めの頃はただただ必死でした。

段々と慣れていき、体験の時の説明なども任されるようになりましたが、牧場を訪れるお客様にいかに分かりやすく牛や酪農の仕事について伝えたらいいのか、社長の説明の仕方などを参考にしながら自分なりに頑

張ってやっていました。その中で、子供たちはもちろん、大人ですら牛や酪農のことで知らないことはたくさんあって、それを知った時は大人も子供も関係なく驚いたり、感動してくれたり、悲しんでくれたり、喜んでくれたりしてくれるのを目の当たりにしました。その時、私が今やっている酪農という仕事はこんなにもたくさんの事を人に伝えることができる仕事なのだと強く感じ、やりがいを感じました。現在では、ありがたいことに地域の小学校に出前授業を行ったりもしています。

本当は自分自身こんなにも続かないと思っていました。でも作業中や体験や販売所で牛や酪農、他の動物のお話をお客様としていると自分も楽しいのです！精神的にも肉体的にもしんどい事はたくさんありますが、酪農という仕事を今自分が楽しいと思える仕事になっている現状を嬉しく思っています。

在学中は先生方に迷惑もかけましたが、酪農大学校を選んでよかったと今は心から思っています。あの時の同期は今でも大事な友達ばかりです。悩みや相談を出来る大切な友達がいて43期生でよかったと本当に思っています！

そして、たくさんの酪農大学校卒業生と、この業界で対面できればいいな、と今後を楽しみにしています。

酪農大学校での思い出

(財)44期生 林 純 二



公益財団法人中国四国酪農大学校創立50周年を迎え、心からお喜びを申し上げます。

私は山口県の酪農家に生まれましたが、三男ということはいいわけに、学生時代から部活動に力を入れ、就職もその部活動の競技の道へ進みました。しかし、競技の現役を退く際、改めて自分の人生を見つめなおし、頭に浮かんだのは生まれ育った田舎の風景、小さい頃に遊んでいた牛舎、酪農業に励む両親の姿でした。“酪農に関わる仕事がしたい！”と思い、中国四国酪農大学校で学ぶことを決めました。

入学時の一番の不安は、年下の同級生と馴染むことが出来るだろうかということでした。しかし、その不安は学校生活が始まると一掃されました。同級生達は歳上の私に対し、ためらうことなく同世代の仲間と何も変わらず接し、受け入れてくれました。若い勢いを感じつつ、とてもありがたかったことを覚えています。共に勉強に励み、作業に四苦八苦しながら挑み、同じ釜の飯を食べ、同じ志を持つ同志として切磋琢磨した日々を過ごしました。

入学時の一番の不安は、年下の同級生と馴染むことが出来るだろうかということでした。しかし、その不安は学校生活が始まると一掃されました。同級生達は歳上の私に対し、ためらうことなく同世代の仲間と何も変わらず接し、受け入れてくれました。若い勢いを感じつつ、とてもありがたかったことを覚えています。共に勉強に励み、作業に四苦八苦しながら挑み、同じ釜の飯を食べ、同じ志を持つ同志として切磋琢磨した日々を過ごしました。

学生生活での思い出は多々ありますが、中でも一番強く心に残っているのは、2年生の時の校内研修での出来事です。私は4～5月に校内研修を行いました。入学したばかりの1年生は作業が上手くできず、そのため私たち2年



妻(第37期生藤田尚子)と娘と一緒に

生の作業が増えることが度々ありました。ある日、忙しく作業を行っている最中に同級生の1人が作業でミスをしてしまい、その場の雰囲気が一瞬で悪くなりました。その時にある同級生が「自分に余裕がないから、他人のミスが気になるんよ。自分に余裕があれば他人のミスもフォローしようって気持ちになるんよ。」と言いました。私はその通りだと気づかされました。それぞれ自分がしっかり出来ていれば雰囲気も悪くならなかったはずですし、それにミスをした人は共に学ぶ仲間です。他人ごとではなく、自分の問題でもあったのだと反省しました。

こうした様々な出来事を日々経験して、酪農の知識や技術だけでなく、人としても成長することが出来、本当に良い経験が出来た2年間でした。

これからも酪農業に従事するにあたり、知識や技術も磨いていきたいと思いますが、人としても成長していけたら良いと思います。

末筆ながら、酪農大学のますますのご発展を祈念いたします。

酪農大学校50周年に寄せて

(財)45期生 難波晃大



酪農大学校卒業から5年目を迎えています。

7年前の4月、初めての寮生活に不安一杯で蒜山に行ったことをつい最近のように思い出します。45期は少数精鋭、同級生14人での共同生活のスタートでした。人数が少ないことをプラスにかえて、みんなで協力し、助け合い、仲の良い14人でした。

学校での生活は、時には真面目に、時にはふざけながら、ほぼ遊びながらのとても楽しい毎日だったと思います。

2年生になり、楽しみに挑んだ校外研修では、酪農の現実を知り、日々挫折の連続だった気がします。しかし、学校では学べなかったことをたくさん教えていただき、とてもいい勉強になりました。研修から帰り、みんな揃ったときの達成感はいいものでした。

たった2年間でしたが、よい仲間ができ、とても充実した毎日でした。酪農大学校だからこそできた、楽しい時間でした。

卒業してからは、岡山県南部にある実家で酪農、野菜栽培をしながら、臨時のヘルパーをしています。酪農では、牛を大切にすることを一番に、少しでも長く牛舎にいられるよう、牛と奮闘中です。また、ヘルパーではいろいろな牧場を見ることができ、また、農家さんとの情報交換や交流もできるので、とてもいい経験をさせてもらっています。

卒業してから5年、今、酪農業が大きく変化しようとしています。酪農家の減少、大規模化、飼料高騰、TPPなどさまざまな問題がでてきています。大きな決断をする時がせまっていて、将来牛が飼えるか心配ですが、時代に流されず、牛が飼える喜びを忘れずに、あせらず前へ進んでいこうと思っています。また、今まで

お世話になった方たちに、成長というかたちで、恩返しができたらと思います。

そして、酪農の楽しさを教えてくれた酪農大学校が長く存続し、発展することを願っています。

将来の夢へと繋げてくれた酪大生活

(財)46期生 田原望実



中国四国酪農大学校創立 50 周年、おめでとうございます。この場をお借りしまして、心よりお祝い申し上げます。

私は、島根県の農業高校へ通っていましたが動物は飼育しておらず、牛についてはまったく分らない状態で酪農大学校へ入学しました。一からの牛の勉強で毎日が新しいことばかりだったため、戸惑いもありましたが、その分自分の知らなかったことを新たに学べてとても新鮮でした。

1 年生のときには、第一牧場と第二牧場での実習と座学を中心とした勉強で、座学で勉強したことを再度実習を通して体で覚えることが出来き、飲み込みは遅かったと思いますが、座学で学んだことをすぐに実習で実践できるこの学校のやり方はとても自分に合っていると感じました。また、いろいろな県から来ている同級生や先輩方と一緒に過ごす毎日も新鮮で楽しいものでした。

さらに 2 年生からは校外研修と校内研修で半年以上も実習が中心となる勉強で、本当に体で覚えろという感じで、実践から学ぶことがたくさんありました。自分で行きたいところを三箇所探して実習に行くという校外研修のカリキュラムは、本当に良い経験になりました。学校だけのやり方だけでなく、いろいろなところへ行き、いろいろなやり方があることをこの校外研修ではたくさん学ばせていただきました。酪農家さんによってこだわっている部分が違うからこそ、そこで搾られる牛乳の味や飼育の仕方が違い、各酪農家さんの考え方を学ぶことが出来ました。そのお陰で、私も自分が目指したい酪農を実践している牧場に出会うことが出来ました。

現在は、岩手県の岩泉にある中洞牧場に勤めて 4 年目になります。この牧場でしっかりと山地酪農を学び、将来は実家の島根県で荒畑になっている家の土地を使って、新たに山地酪農を始め、今度は私が実家の土地を守っていこうと考えています。

こうした夢を持つことが出来たのも、たった 2 年間でしたがこの酪農大学校に進学していろんな経験をさせていただいたことがあったからだと思います。本当にこの学校を選んで良かったと感じています。

最後に、これからの酪農大学校の発展をお祈りするとともに、これからの酪農、農業を支えていく若者を酪農大学校でさらに育てて行って欲しいと思います。

海外研修を終えて

(助)47期生 高 濱 弘 一



中国四国酪農大学校創立50周年おめでとうございます。

私が酪農大学校を卒業してから2年が過ぎ、50周年の寄稿を依頼され海外研修の状況やその後のことを書かせてもらうことにしました。

私の実家は鳥取県で酪農を営んでいますが、私が酪農の世界に関わるようになったのは酪農大学校に入学してからでした。酪農大学校時代は周りについていくので精一杯で、卒業後の進路もすぐに実家の酪農を継ぐか、地元の酪農ヘルパーに勤めるかしか考えていませんでした。

そんな時、2年生の夏頃に先生から「卒業後はカナダに海外研修に行ってみないか」と唐突に誘われました。最初は断りましたが、いろいろ考えるうちに自分の価値観や経験を広げたり技術を磨けるのではと思い、最終的に行くことを決めました。

行くと決まってからは、知らない土地で言葉も通じないのに行ってやっていけるのだろうかと不安になることが多かったのですが、それと同じくらいにワクワクしていたのを覚えています。

海外に到着してみると、目新しいものや英語が飛び交う状況に本当に海外に来たんだと感動していました。一方で、牧場での研修では日本とさほど変わらない飼い方をしていて驚きました。しかし、一頭一頭への管理が徹底しており自分の観察力が無いのをよく怒られていました。私がお世話になった牧場がショーに出すような牛ばかり飼育していたこともあったのですが、おかげで牛をよく観察できるようになったと思います。研修を終える頃には少し信用してもらえたのか大半の仕事を任せられるようになりました。ただ英語があまり上達しなかったことが心残りです。

海外研修を終えた後は、地元の酪農ヘルパーとして働き、現在は実家で30頭の搾乳牛を管理しています。今後は海外で得た経験などを糧に規模拡大などをしていきたいと思っています。

今回寄稿依頼されたことで、多くの知識や経験を酪農大学校からさせていただいたことに改めて感謝するとともに、この酪農大学校からより多くの後継者、酪農・畜産関係者が出てくることを期待しています。



Quality Holstein牧場(カナダ オンタリオ州)



カナダのロイヤルショー

夢を繋いだ酪農大学校

(公助)48期生 江草 真一

中国四国酪農大学校での2年間は、私にとってとても重要な月日だったと現在感じています。

私は岡山県中西部の肉用牛農家に生まれ、小さい頃から父と叔父で経営する畜産業を見ながら育ちました。見様見真似で餌やりや牛の世話をし、いつの間にか牛舎での手伝いは私の日常生活となり、私も牛と過ごす農家になりたいと思うようになりました。

高校は普通科に進学したため、進路を決める時期になると国公立や私立の大学への進学を勧められましたが、地元の酪農の先輩から酪大の話聞くチャンスがあり、楽しそうに話される先輩の姿を見て、私も酪大へ進学する決意をしました。

授業では多くの専門的な内容を学ぶことができ、良かったと思います。実習では、早朝からの搾乳や作業に慣れるまでは苦痛でした。また、氷点下の中での作業、夏の暑い中での草刈りや収草も大変でしたが、今の私にはとても貴重な経験でした。また、在学中に受験することができる家畜人工授精師と受精卵移植師の資格試験では、友達と一緒に教え合いながら一生懸命勉強しました。さらに、2年次の校外研修では、多くのことを経験し、新しい発見があり、細かい気配りを教わりました。生き物を扱う大変さも改めて感じさせられましたが、自分の努力が結果に繋がるという楽しさにも気付くことができました。

卒業後は、実家に戻り家業の畜産を継ぎ、繁殖部門を任されました。現在は成牛83頭、育成牛46頭を飼養しています。経験したことのないことが多くあり苦勞していますが、酪大時代を思い出し、一生懸命頑張っています。また、同じ地域で酪大を卒業された先輩方が活躍されているので、とても心強く、いろいろ相談に乗ってもらいながらこれからも努力したいと思っています。

今の自分がここにあるのも、父・叔父が牛との出会いを作ってくれたこと、そして酪大で出会った先生や先輩・同期・後輩のおかげです。すべての方に感謝し、努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、中国四国酪農大学校創立50周年おめでとうございます。これからもますますの発展をお祈りします。



今となって思うこと

(公財)49期生 藤原彩香
(旧姓：竹中)

公益財団法人中国四国酪農大学校の創立50周年、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。
私はこの春に酪農大学校を卒業し、社会に出てまだ数ヶ月ほどですが、ここで学んだことや経験したことは大変貴重なものであったと強く感じています。

現在私は、岡山県南部の牧場に勤務し、子牛の管理や搾乳作業をしています。前搾りの技術であったり、牛追いだったり、哺乳や機械操作・・・やはり学校で実習や座学を通じて2年間学んできたことが現場でも活かされていると感じることが多々あります。しかしながら、在学中にもっといろいろなことに興味を持ち、調べ、技術を身につけておけばよかったと現場に出てから後悔している部分もあります。

入学して間もないころの実習では、一生懸命ではあったものの、今になって思い返すと「言われたことだけやる」というところを目標に作業していたような気がします。日々の実習の中で「なぜこの作業をやるのか」「どうしてこうなるのか」など「なぜ」「どうして」と疑問を持って、そしてそれを解決し、自分の知識として吸収していれば、現場に出た今、牛の体調の変化を目視で察知したり、牛の異変に気づいてすぐ応急処置を施したりできるはずなのに、できないでいる自分を情けなく、そして恥ずかしく思います。まだまだ未熟な私ですが、さらに勉学に励みもっと牛について調べ、もっと先輩方にいろいろなことを教わりながら、少しずつ前に、そしていつかはきちんと「牛を見られる」人になりたいというのが目標です。

そして、酪農大学校で過ごした2年間の中で手に入れた「同じ夢を持つ仲間たち」は、私の人生において大きなものであると感じます。卒業後もたまに連絡を取り合い、牛の管理で迷った時や行き詰ってしまったときに助けてもらっていますし、酪農についての新しい情報の交換をしています。こういったことができる仲間に出会えたこと、そのような場を与えてくださった酪農大学校に大変感謝しています。ありがとうございました。

最後になりましたが、酪農大学校のますますのご発展とご繁栄をお祈り申し上げます。



第47期生
東郷美幸さんと一緒に



公益財団法人中国四国酪農大学校創立 50 周年によせて



上原 逸 史

(昭和 54 年 4 月～昭和 56 年 3 月 第 1 牧場長)

(平成 19 年 4 月～平成 25 年 3 月 校 長)

岡山県立酪農大学校から昭和 40 年に財団法人中国四国酪農大学校に改組されて、平成 27 年度で 50 周年を迎えられたことに心からお慶び申し上げます。

私は、親子 2 代酪農大学校に勤務させていただきました。父は、岡山県立時代に、私は昭和 54 年度から 3 年間と岡山県を退職した平成 19 年度から 6 年間、通算 9 年間勤務させていただきました。

最初の勤務時の思い出は、長雨・冷夏で牧草の収穫減により粗飼料不足となり旭川の河川敷の野草を刈らせてもらい粗飼料不足（肥育牛）を補ったこと、 トウモロコシの畦間の除草を学生たちと競争しながら這いつくばって行ったこと、本校の前の道路沿いに樹立していたポプラ並木が台風により本館玄関前のポプラ数本を残しほとんど倒され、その倒木を一定の長さに切り製材所に運び込んだこと、学生数が 20 名以下になり職員が分担し中国四国・兵庫県の農業高等学校に訪問し、酪農大学校の P R、本校への進路指導をお願いして回ったことが思いおこされます。

平成 19 年 4 月からは、平成 18 年度から飲用牛乳の消費等の落ち込みなどで減産型計画生乳生産、購入飼料価格の高止まりなどから楽な経営状況ではありませんでした。平成 20 年度に生乳計画生産数量の増産、30 年ぶりの乳価の引き上げがあり、さらに平成 21 年度に乳価の再値上げがあり僅かではありますが、明るい兆しが見えてホッとしました。しかし、将来の酪農産業の基礎を築くという観点から、今後も本校の役割が問われる時代だと痛感する中で、国をはじめとして地方自治体も財政事情は厳しく、岡山県でも大きな課題となり厳しい歳出の削減が行われることになり、「岡山県行財政構造改革大綱 2008」を定め外部団体の助成の見直しが行われることになりました。本校もこの大綱に沿って検証、見直しさらに発想の転換を行うなどして自主財源の確保等を行うことになりました。そこで、県畜産課の指導のもと本校の卒業生、農業高等学校、農業団体、関係団体の意見を聞き「中国四国酪農大学校中期運営計画」を策定し、6 次産業化等に関する科目などを充実させた授業カリキュラムへの再編、安心して勉学を続けるための奨学金制度の導入、さらに 4 年生大学への編入学が可能となる専修学校（平成 22 年 8 月 9 日認可）へ移行しました。

また、管理運営面では、組織体制の見直しによる人件費の大幅な削減、学校管理コストや牧場運営費の縮減、授業料等の値上げ、社会人短期研修コースの創設など、新たな財源確保を行い自主的な運営への転換を図るとともに、国（農林水産省経営局）が就農を前提とした研修事業に対する補助制度を新設したことから助成を受けることになりました。この補助事業で第 1 牧場のパドック脇にあった旧分娩牛舎のところに育成舎を建築し、情報処理室のコンピューターおよび視聴覚機器の更新ができました。

さらに、県畜産課の協力のもと構成県の県庁、農業団体を訪問し支援をお願いし、構成県からの講師派遣による人的支援、農業団体からも支援していただくことになりました。

学生募集活動では岡山県の支援をいただいて県内の高等学校への訪問、中国四国・兵庫県、九州等への募集

活動に努めました。

また、従来からの法人制度が大きく変わり、一般財団法人と公益財団法人になるかの選択肢に迫られ、公益性が高い酪農大学校は公益財団法人に移行する手続きをとり認可され、平成25年4月1日から「公益財団法人中国四国酪農大学校」に移行することになりました。

この間、ご支援をいただいた農林水産省、中国四国農政局、岡山県、構成県、農業団体、地元の関係機関並びに関係団体そして同窓会や関係者の皆様のご支援により引き続き魅力ある学校づくりを進めながら酪農の担い手の養成ができるようになりましたことに心からお礼申し上げます。

酪農大学校は、実践を通して技術、理論を学ぶ学校であり、全国の畜産農家に学生たちがホームステイして畜産技術、社会情勢、社会のルール等を教えていただく校外研修という素晴らしい教育システムがあります。大学校職員の皆様には、このシステムを活かし更なる躍進をされること、酪農大学校に入学され巣立っていかれる皆様も、各方面で活躍されている先輩たちに続いて活躍されることをお祈り申し上げます。

校長として在職中のこの6年間に、最初の勤務時に入学してきた学生の御子息が、入学してこられた時にはその当時のことが懐かしく思い出されるとともに歳月を感じました。

最後になりましたが、酪農大学校の職員並びに関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、酪農大学校の更なるご発展をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

酪農大学校での思い出

森 本 博 之

(昭和60年4月～昭和62年3月 第1牧場長)

(昭和62年4月～昭和63年4月 第2牧場長)

(平成18年4月～平成21年3月 副校長)



創立50周年を迎えられましたこと誠におめでとうございます。

私が酪農大学校に最初に勤務したのは昭和60年4月、第1牧場で2年間、第2牧場での1年間でした。最初はパイプラインミルクカーやロータリーパーラーの機械操作・搾乳手順等を覚えながら学生の実習指導や牛の管理等を行いました。当時は学生数が1年生12名の時もあり、職員も学生と一緒に朝夕の搾乳、一輪車での糞出し、サイレージをモッコで搬出給与等忙しく走り回る毎日でした。ある朝、溝が真白く見え搾乳室へ飛んで行くとバルク内には牛乳は無く始末書を書いたこと。石田校長と学生募集のため中四国の農業高校に勧誘に行ったこと。暑い日にベラーでコンパクト梱包した重たい乾草を倉庫に積み上げた後の冷たいビールが美味しかったこと。隠岐の島への職員旅行で魚拓を作り次班への奮起を促したことが昨日のように思い出されます。

2回目の勤務は平成18年4月からの3年間でした。校舎は木造から近代的な建物に、第二牧場も新築機械化され、搾乳室もヘリンボン式に改善されていました。

有富校長が平成18年10月28日逝去され、今後どうなるのかと心配しましたが、金山畜産課長の校長兼

務により何とか1年を乗り切り、平成19年4月、上原校長が就任され、7月25日には第1牧場の新牛舎での搾乳が開始できました。しかし、平成20年1月に佐藤技師が急死、不幸が重なりショックで落込みましたが、素晴らしい職員の方々に恵まれ、助けていただき勤められたことと感謝しています。お二人のご冥福をお祈りし、酪農大学校が今後益々発展されますことを心より祈念しています。

「蒜山では多くの施設整備を担当しました。大満足でした！」



西家 忠治

(平成8年4月～平成9年3月 教務課長)

(平成9年4月～平成11年3月 教務部長)

酪農大学校の本館を造るときに、「基本図」を依頼され、作成したのが下の絵です。現在の本館と塔の部分の一部異なるのですが、左右対称の「関西学院大学の図書館のイメージ」を借用して、蒜山版にし、知事への予算協議の際に使われました。これを描いた時は、県庁畜産課の酪農飼料係にいたのですが、本来の仕事を先輩に任せてしまって、自宅に籠もり、構想から最終の仕上げまで2週間、このためだけに没頭したのが記憶に残っています。

上の写真は、「ヘルパー研修生の宿泊施設」です。第2牧場の研修施設と併せ、2棟ともに同じスタイルで作りました。外観がピンク色だと一部から反対されましたが、作ってみると良く景観とマッチしました。当時職員の宿舎が不足しており、将来の転用も視野にいて、玄関用の出入り口を2つにし、内部を全く左右対象にしました。さらに第2牧場の畜舎や堆肥舎等の施設の改築を担当するなど、大きな建設工事をさせてもらい、とてもやりがいのある3年間でした。

また、写真が大好きですが蒜山にいないければ撮れないようなベストショットも撮れて大満足でした。今後とも酪農大学校のますます発展をお祈りしています。



私の畜産人生の礎を築いてくれた3年1ヶ月



岡山県農林水産部畜産課

総括参事 **馬場 誠**
(昭和60年4月～昭和61年3月 教務課技師)
(昭和61年4月～昭和63年4月 第1牧場技師)

昭和60年4月、最初の辞令を受け、その足で蒜山の地へ赴任した。歩くと床がきしむ木造の校舎が迎えてくれた。残雪はあるもののうららかな春の光に満ちあふれた美しい酪農大学校がそこにあった。

さて、着任間もない頃種付けを頼まれたが子宮頸管が通らず学生の眼が痛かったことを思い出す。非農家の私は、当時牛を引くこともトラクターを運転することも出来ず、打ちのめされかけた時チャンスが訪れた。乾草の収穫である。握力90kg、背筋力280kg。運ばれてくる乾草を牛舎2階に次々と投げ入れた。「先生やるな！」との声が嬉しかった。遊びも学生達と真剣に打ち込んだ。校内ソフトボール大会では学生を打ちのめし、冬には雪に覆われた草地に手製の照明灯を設置し学生とスキーを楽しんだ。学生達とも打ち解け、毎夜寮を訪ねては大いに語り合った。酪農大学校を異動した直後の瀬戸大橋博覧会アームレスリング大会で優勝し「牛乳はパワーの源だ。」とコメントして堤振興局長からお褒めの言葉を頂いたが、これも酪農大学校で鍛えられた腕力の賜であったと感謝している。

仕事の面では、中山教務課長から学生募集のポスターを作るよう命じられカラーイラスト版ポスターを作り上げた。良い出来映えであったが「dairy」の綴りが間違っている事に気づかずご迷惑をかけてしまったが、石田校長を始め上司からは失敗の咎めより新たなチャレンジを褒めて頂き涙が出た。第1牧場では牛群改良のため膨大なデータを分析し当時としては珍しかった輸入精液やフィールド検定牛の有望な精液を使わせて貰った。結果、牛群能力は飛躍的に伸びバルククーラーがあふれんばかりとなって学生達と喜びあったことは良い思い出である。

畜産の技術など何も持たない私の酪農大学校の3年1ヶ月は、良き上司に恵まれ、学生達と創意工夫し新しいことに次々とチャレンジした時代であった。汗をかき一つ一つ目標を達成する喜びを体感できた至福の時であった。卒業式で多くの学生が涙を流してくれた。「彼らの喜ぶ顔が見たい。」それが私の夢となった。彼らの寄せ書きに「人生、粘りと頑張り」と記したが、これは私の畜産人生の礎を築いてくれた酪農大学校の皆様に対する感謝の言葉である。さらに、この感動と感謝の気持ちを「燃」の一字に込め発表した書道作品は人生の宝物である。

最後に、私に感動あふれる畜産人生の第一歩を踏み出させて頂いた酪農大学校の益々のご発展と卒業生諸氏のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

愛される酪農家を目指して

(公助)50期生 坂本 雄也

私の実家は山口県の農業生産法人で酪農を営んでいます。牛乳や乳製品を生産する傍ら、搾乳体験などを通じて訪れる人に酪農を知ってもらう取り組みも行っています。しかし、私は酪農に関して全く知識もなく、また牛と接したこともなかったうえに、父や祖父の働く姿を見て、「毎日朝早くから夜遅くまで本当に大変そうだ。日曜日も正月も仕事があり、どこかに家族で出かける機会もない。私はこんなことは将来やりたくない。」とさえ思っていました。そこで、酪農とは全く異なる分野を選択して国立大学に進学したものの、夢も目的も見つけられずただ淡々と毎日を過ごしていました。



大学の夏休みに実家に帰省した際に、祖父や父が毎日一生懸命働く姿やこれからの農業について熱く語っている姿を改めて目にして、ふと、私も酪農をしてみたいという衝動に駆られました。また、実家の仕事を手伝う中で、初めて搾乳体験をした小学生がとても美味しいと喜んで牛乳を飲んでいる姿を見た時、初めて父達が汗水を流しながら働く意味を理解した気がしました。同時にもっとたくさんの人を笑顔にし、また子供たちに「酪農の魅力」を伝えられたら、もっと酪農のことを身近に感じてもらえ、生産する牛乳や乳製品に愛着を持ってもらえるのではとの思いが強くなってきました。この気持ちを父に相談したところ、酪農大学校への進学を勧められました。



入学当初は、早起きに慣れない上に牛について覚えることも沢山あり、体力的にも精神的にとってもきつい思いばかりでした。しかし、今では同じ夢を持つ同志とともに切磋琢磨して、日々の勉強、作業ともに向上していくことができ、心身ともにとても充実しています。酪農大学校に入学し毎日新しいことの発見の連続で、ますます酪農に関して興味がわき、そして奥深さを実感し、酪農に対する考えが大きく変わりました。

今後、牛乳・乳製品の市場は国際競争や産地間競争がますます厳しくなることが予想される中、日本で生産される食料の強みは、安心安全かつ新鮮であること、そして生産者の顔が分かることです。毎日牛乳を飲んでいても、どこでどのようにして作られているのかを知らない消費者は、まだ多いように感じます。大きな体で迫力があって美しく、そして優しい牛達が沢山のえさを食べてたくさんの美味しい牛乳を生産してくれるという酪農の魅力をより多くの消費者の方に感じてもらい、そして毎日飲む国産の牛乳に思いを持ってもらいたいです。「きつい、きたない、きけん」など3Kの職場ともいわれている酪農が、実際は、どんなものでどれだけ素晴らしいかを示し伝えていくことで、「かっこいい、感動がある、稼げる」という新3Kが酪農に対するイメージへと塗り代わり、若者のあこがれの職業となれば、いつか若者で溢れかえるような活気のある産業に発展していくと思います。そのために私は、人が多く集まる場所で、酪農の魅力伝える牧場を開きたいと考えています。卒業後は、酪農大学校で得た知識、技術、人脈を活かして、この夢に向かって一歩ずつ前進していきたいと思っています。

酪農大学校に入学して

(公財)51期生 村上 咲



「この学校に入学できて良かった。」酪農を学ぶ者として思うことです。牛とともに暮らし、牛中心の生活を送る中で得られるものは計り知れないほどあります。生命あるものを相手にしているんだという強い責任感を芽生えさせてくれたのもこの学校です。`牛のため、`消費者のため、ではなく、ただただ必死に機械的な牧場作業をしていた高校生までの私を変えてくれたことにはとても感謝しています。牛を観察する余裕もなく作業していたあのころを恥ずかしく思います。

今、私は同じ夢を持つ仲間といっしょに勉強できて、牛の話で共感できることに幸せを感じています。保育士さんや看護師さんのように人気のある職業ではありませんが、酪農という立派な仕事に就きたいと思っている仲間が近くにいるというのはとても心強いです。作業していても気合が入りますし、たくさん刺激を受けます。酪農家の減少、TPPの問題がある中に飛びこんでくるわけですから、みんな覚悟を決めて取り組んでいるのだと思います。休みも少なく、早朝からの作業があるこの職業に人生をかけているからこそ頑張れるのかもしれません。

そんな人達が集まってくるこの学校も今年で創立50周年。これまでの卒業生の築いてくれた歴史が半世紀を迎えます。私は、本当に好きじゃないと続けられないこの職業を選んだ先輩達に続くような人になりたいです。そして、私達が卒業してからも、酪農を求めて私達の後に続いてくれる人がいたらいいなあと思います。

乳製品、牛乳が必要不可欠なこの時代、少し大変な職業かもしれないけれど、強い気持ちを持って入学してくる人がしっかり勉強できるこの学校がいつまでも続きますように。



私たち51期生の写真が「晴れの国 おかやま牛乳」のパッケージに印刷されたよ



これからの酪農大学校

教務課長兼第一牧場長 関 哲 生



私は、H21年4月に岡山県畜産課からこの学校に派遣職員として赴任しました。行政機関で牛群改良や生乳流通などの酪農振興を担当した経歴はあるものの、自ら乳牛を飼育管理した経験など全くない状態でいきなり第1牧場長を任命され、頼りない場長で当時の学生には申し訳なかったと思います。しかし畜産課勤務時代に牛群検定事業を通じて勉強した飼養管理の理論や、H12年の岡山全共当時に出品対策として全県の優秀牛を見て回る機会に恵まれた経験を生かし、より良い牛群を作ろうという情熱は誰よりも強く持っていました。また、学生数が減少し、県の行政改革の方向性が検討される中で、酪大の存続について議論されている時期でもあり、学校の使命を着実に遂行し酪農振興や地域貢献に繋がる成果を上げることで存在意義を示すことが喫緊の課題と認識していました。

「酪大の使命」には3つの柱があると考えています。

第1の使命は言うまでもなく「人を育てる」です。優秀な酪農・畜産の担い手を育て、産業界に送り込むことにより産業振興に貢献することはもちろん、農協や乳業、農業機械等に関連する酪農と密接に関わる組織に携わる人の酪農に対する理解を深めることにより、より効果的な支援の充実を図ることも酪農振興の重要な要素であります。このため、H24年から社会人フィールド研修科を設け、社会人を対象に実習や講義を展開しています。また、人を育てるためには充実した実習環境でなければなりません。本校が抱える2つの牧場は、頭数や生産乳量、圃場面積等において実習農場としては日本屈指の規模を誇り、日々の実践的な研修により即戦力を養成することができます。今後は、一層の牛群改良や自給飼料率の向上に努め、生産性の高い牧場運営に努め、より質の高い実習ができる環境を整備する必要があると考えています。

第2に「魅力を伝える」です。牛乳がどこでどのように作られているか知らない消費者は他の食品よりも多いと感じます。酪大では、従前から多くの幼稚園、小・中・高生や食品に関わる団体など、搾乳体験や牧場見学の形で受け入れてきました。さらに今年からは県内乳業メーカーとタイアップして、量販店で募集した親子を対象とした見学ツアーを定期的に企画しています。子牛の愛らしさ、経産牛の迫力、環境に優しい循環型酪農など、訪れた人は酪農の魅力に感銘を受けています。このような取り組みを通じて日本の牛乳を身近なものに感じる消費者を増やすことが国産牛乳や乳製品の消費拡大につながり、さらには意欲ある担い手の増員につながるものと信じております。このためにも、いつでも誰にでも見せられるよう牧場の環境美化と生乳の品質にこだわりながら、学生の指導にあたっています。

第3に「種畜の供給」です。具体的な計画があるわけではありませんが、各地の公共育成牧場が廃止されている中で、今後、公共育成牧場的な役割を担い地域酪農の振興に貢献できる可能性があると考えています。また、各経営において6次産業化が進む中、ジャージー種畜の需要に対応できる可能性も考えております。

以上のように、「牛を作り、人を育て、魅力を伝える」・・・この3つの使命をしっかりと果たしながら、地域の酪農・畜産の発展に貢献できる施設としてより一層の充実強化を図りたいと考えております。

学 校 の 沿 革

前 身

- 昭和24年 7月 ○岡山県中福田家畜保健衛生所開設
(岡山県真庭郡八束村中福田)
- 昭和32年 4月 ○岡山県酪農試験場蒜山分場設置
(県立酪農大学校前身、川上村西茅部)
- 昭和38年 4月 ○岡山県乳牛育成場開設
(第2牧場前身、川上村上福田)

岡山県立酪農大学校

- 昭和36年 12月 ○津山市大田、酪農試験場内に開校
○酪農に関する基本的な知識技術習得と健全な酪農経営者を養成するための教育を実施
- 昭和37年 4月 ○真庭郡川上村西茅部に新校舎を建設、酪農試験場蒜山分場を吸収してここに移転し、新たに岡山県家畜保健衛生研究所を併設する。
○募集人員は1学年30名、1年目に4ヶ月就学し、8ヶ月は在宅研修とし、修学期間は3年間。
○この間、学生は草地の開墾、ポプラの植樹等を精力的に行う。
- 昭和40年 8月 ○皇太子殿下行啓(平成天皇)
(津山市を中心として開かれた第15回海洋少年団全国大会にご出席)
- 昭和42年 3月 ○県立酪農大学校閉校

財団法人 中国四国酪農大学校

- 昭和40年 11月 ○中国四国9県及び兵庫県の各県の基金積み立てにより、財団法人組織による財団法人中国四国酪農大学校が創立される。
○岡山県立酪農大学校と三木が原の岡山県乳牛育成牧場の施設を譲り受ける。
○募集人員は1学年40名、修学期間は2年間。
- 昭和41年 8月 ○財団法人中国四国酪農大学校第1期生入寮
- 昭和42年 4月 ○昭和天皇・皇后両陛下行幸啓
(岡山市金山で行われた第18回全国植樹祭のお手播き行事でご来校)
- 6月 ○西日本飼料研修会が本校で開催される。
○NHK明るい農村「農村新時代 酪農大学校」の撮影が行われ、全国放送される。
- 10月 ○ワラビ中毒が発生
- 11月 ○天皇皇后両陛下お手播き記念碑除幕式
- 昭和43年 2月 ○蒜山地方は大雪に見舞われ、第2牧場は孤立、牛乳出荷を中福田まで人力そりで行う。
- 昭和43年 4月 ○牧場統合(第2、第3を統合し、第2牧場とする)。
○オーストラリア駐日大使アレクサン・レイブン氏夫妻来校
(蒜山地域ジャージー酪農視察)
- 9月 ○ニュージーランド交換学生来校
- 10月 ○第1回全日本ジャージー共進会開催

		○「学園だより」第1号発刊
昭和44年	8月	○ホルスタイン種優良基礎雌牛導入(アメリカ)
昭和45年	2月	○第2牧場牛舎火災(被害僅少)
	8月	○ジャージー種優良基礎雌牛導入(ニュージーランド)
		○R S K山陽放送、酪農大学校を放映
昭和46年	2月	○蒜山地方に豪雪、第2牧場事務所から宿舎までロープ伝いで帰宅
	10月	○高松宮殿下ご来校
昭和47年	5月	○R S Kテレビ生放送、岡山・福岡・大阪より三次元放送、女子学生3名出演
	7月	○集中豪雨で第1牧場水源地に被害
昭和48年	3月	○第7期卒業生、卒業記念に牛魂碑建設 (第7期生三好正文氏、揮毫による)
昭和49年 ～昭和53年		○施設整備5カ年計画樹立 第1・第2研修センター、男子寮、女子寮、酪農後継者養成施設、体育館、ロータリーパー ラー、気密サイロ、スラリーストアー、草地造成、牧道整備等の実施
昭和49年	10月	○全国ジャージー大会開催 ジャージー種導入20周年記念事業
昭和50年	5月	○NHKテレビで「酪農大学校を訪ねて」放映
昭和51年		○財団法人構成各県(10県)の出捐金1,000千円が納付完了
昭和52年	5月	○酪農大学校教育施設落成式挙行(第1・第2研修センター、体育館、女子寮他)
	11月	○故惣津律士初代校長胸像除幕式
昭和57年	9月	○台風により本校ポプラ倒木(約50本)
昭和59年	4月	○故三木知事由来のスズランを津山市内の福祉施設へ贈呈
	9月	○第2回全日本ジャージー大会開催 (ジャージー導入30周年記念)
昭和60年	10月	○財団法人創立20周年記念行事開催
昭和61年		○コンピューター利用講座を開始
昭和62年		○受精卵移植技術講習会を本校で開始
昭和63年		○第24期生から学制の変更 4月～翌年3月までの1年間校内、2年次の4月～11月まで校外研修(内2ヶ月は校内 研修)、12月～3月まで校内 旧学制: 4月～9月校内、10月～翌年9月校外(内校内2ヶ月)、10月～3月校内
平成2年		○牛削蹄師免許講習会を本校で開始
平成3年	1月	○山陽新聞奨励賞受賞 (産業部門:長年に亘る後継者育成が認められる)
		○酪農ヘルパー全国協会委託研修施設の指定、酪農ヘルパー養成の開始
	9月	○台風19号により第2牧場ポプラ倒木(約50本)
平成4年	3月	○「ジャージーフォーラム」の開催 ○女子学生増加に伴う女子寮の増築 ○学生の情操教育用として第2牧場に乗馬施設(パドック)を整備

- 平成5年 ○第2牧場にオートタンDEM型パーラーを導入、併せてパーラー屋根にシンボルとしてカリオン時計を設置
- 県道上福田線改良工事に伴い、職員宿舎(1棟2戸)、車庫、格納庫を移転新築
- 第2牧場周辺を「ジャージーとのふれあい広場」として年次計画的に舗装整備
- 学生寮裏の稲荷神社修復(鳥居、神社新築)
- 冷夏長雨でトウモロコシ、牧草の著しい収量減
- 平成6年 ○本館の新築に着手(平成6年度から2カ年計画)
- 学生の増加に伴い、男子寮の増設(3部屋)
- 10月 ○本校で中央畜産会主催の「担い手フォーラム」の開催
- 異常干ばつのため第2牧場の水源を整備、乳量及び牧草収量減少
- 平成7年 6月 ○旧本館閉舎式を行う
- 11月 ○財団法人創立30周年及び本館新築落成記念式典
- オーストラリア・オンカパリング専門学校ビクターハーバー校と相互学生交換調印
- ジャージー導入40周年記念式典開催
- テニスコートの新設
- 第2牧場に貯水槽新設
- 平成8年 6月 ○タンザニア国畜産局長来校
- 10月 ○オーストラリア・クロンプトン校校長来校
- 第1牧場ヘルパー宿泊施設新築
- 第2牧場研修生滞在施設新築
- 平成9年 8月 ○NHK人気番組「ひるどき日本列島」の取材を受ける
- 第2牧場フリーストール成牛舎、育成牛舎、飼料庫、堆肥舎新築
- 9月 ○台風により第2牧場ポプラ並木が壊滅的な打撃を受ける
- 平成10年 4月 ○第2牧場搾乳牛新築フリーストール牛舎へ移転
- 第2牧場TMR給餌方式の導入
- 第1牧場堆肥舎(サークルコンポ方式)新築
- 平成11年 3月 ○第1回白樺植樹第2牧場旧ポプラ並木路で実施
- (財団法人岡山県郷土文化財団事業により、倒木したポプラに替わる並木の形成、1500本植樹、以後毎年約100本植樹)
- 平成12年 7月 ○全国農業大学校協議会へ加入
- 11月 ○「第11回全日本ホルスタイン共進会・第3回全日本ジャージー共進会」が岡山県児島郡灘崎町で開催される
- ・本校第2牧場からジャージー種牛4頭出品
- カヤベライラック ダイオン レインボー(1等賞3席)
- カヤベマウントパール ダイオン ブラウン(2等賞3席)
- カヤベブルー ダイオン フェスタ(1等賞2席)
- カヤベライラック ハーミテージ ベガ(2等賞5席)
- ・第27期生永禮淳一氏ホルスタイン種最高位賞、高円宮杯受賞
- 平成14年 4月 ○「エコオフィス・まきばと握手事業」の実施(H14～H16)

- (県庁ペーパーシュレッダーの畜産利用実証事業)
- 6月 ○ジャージー種優良基礎雌牛の導入(熊本県小国町4頭、蒜山地域4頭)
- 10月 ○「第20回中国ブロック農業大学校研修生のつどい」が本校ホスト役で開催
- 12月 ○おかやま酪農業協同組合の正会員となる。
- 平成15年 3月 ○ジャージー種優良基礎雌牛の導入(群馬県嬭恋村10頭)
- 12月 ○オーストラリア・SADAと交流協定(交換学生研修)調印
- 平成16年 3月 ○ジャージー優良基礎雌牛の導入(群馬県嬭恋村10頭)
- 10月 ○台風23号の襲来により大きな被害を受ける
(2牧パーラー舎、格納庫、わら庫等の屋根の損傷、ポプラの倒木など)
- 平成17年 2月 ○第2牧場草地でタンチョウ鶴の試験飛行
(岡山県自然保護センターによる野外調査)
- 「中国四国農大協議会プロジェクト発表会」本校ホスト役で開催
(発表:岡山市メルパルク、現地視察:笠岡湾干拓地内牧場)
- 8月 ○財団法人日本宝くじ協会助成によりバス購入
- 9月 ○貝殻等を利用した畜舎排水浄化システム実証展示施設の整備
(第一牧場・社団法人海と渚環境美化推進機構(マリンプルー)事業)
- 10月 ○第2牧場旧育成牛舎撤去、ふれあい広場として整備
○畜産担い手育成総合整備事業による草地造成・整備(第1牧場、第2牧場)
- 11月 ○畜産担い手育成総合整備事業による第1牧場搾乳牛舎建設着手
(搾乳牛50頭ストール牛舎)
- 「第12回全日本ホルスタイン共進会・第4回全日本ジャージー共進会」、栃木県壬生町で
開催される。
・第34期生美甘正平氏ジャージー種最高位賞、準名誉賞
・第7期生長恒泰治氏ジャージー種名誉賞
- 12月 ○蒜山酪農業協同組合正組合員となる。
○豪雪により三木ヶ原第二牧場草地牧柵が倒壊
- 平成18年 3月 ○財団法人創立40周年記念植樹
- 10月 ○有富校長急逝(10/28)→ 金山畜産課長校長兼務
- 11月 ○豪雪により倒壊した牧柵の復旧
- 12月 ○第一牧場搾乳牛舎新築
- 平成19年 3月 ○第一牧場旧搾乳牛舎を乾乳牛舎へ改装
- 5月 ○第一牧場飼料庫新築
- 平成20年 10月 ○「第26回中国ブロック農業大学校研修生のつどい」本校ホスト役で開催
- 11月 ○岡山県財政構造改革プラン策定(酪農大学の自主的な運営の抜本的な見直し)
- 平成21年 9月 ○第50回蒜山地区乳牛共進会
・カヤベセイエラ ゴールドウイン クラリス(H種)がグランドチャンピオン受賞
- 10月 ○「地域エコフィード実証試験」(10月～12月)
・第二牧場ジャージー種乳牛への緑茶ガラ給与実証試験((社)岡山県畜産協会)
- 11月 ○「カッコイ牧場作り in 酪農大学校」

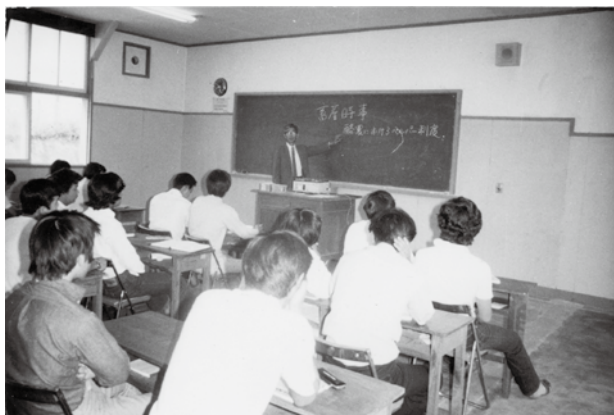
- ・蒜山イキイキ酪協議会による第二牧場牧柵設置
- 平成22年 1月 ○中央職業能力開発協会から緊急人材育成支援事業の訓練施設に認定
- 2月 ○タンチョウ冬季行動調査(第二牧場ふれあい広場)(岡山県自然保護センター)
- 4月 ○自給飼料生産技術定着化事業(重点分野雇用創造事業)(～H23.3)
- 7月 ○学校法人順正学園と連携・協力に関する協定を締結
- 8月 ○学校教育法に基づく専修学校化認可
- 10月 ○放牧指導者育成研修会開催(酪農大学校)(全国飼料増産協議会)
- 平成23年 3月 ○第二牧場パーラー施設の高度化
- カンボジア王国皇族 ノロドム・シリウット殿下来校
- 4月 ○受精卵移植による和牛子牛の生産育成実習開始
- 専修学校「中国四国酪農大学校」の開校(農業専門課程:酪農科)
- 8月 ○「カッコイー牧場作り in 蒜山三木ヶ原エリア」
- ・蒜山イキイキ酪協議会による第二牧場牧柵設置
- 9月 ○第51回蒜山地区乳牛共進会
- ・カヤベセイエラ チャンプ パツシヨン(H種)がグランドチャンピオン受賞
- 10月 ○海外牛削蹄技術セミナー
- ・米国コーネル大学獣医学教授 チャック・ガード博士来校
- 11月 ○三木ヶ原並木再生事業(真庭市)により第二牧場旧ポプラ並木道にもみじ葉楓を植樹
- 平成24年 2月 ○中期運営計画の策定(学生数の確保目標の設定・学生支援の充実・学生納付金の段階的引き上げ等)
- 「全国農業大学校等プロジェクト発表会・交換大会」
- ・第47期河上大樹氏意見発表の部特別賞(日本農業新聞賞)
- 公益財団法人中国四国酪農大学校移行のための評議員選定委員会開催
- 4月 ○酪農フィールド研修事業開始
- 学生支援の一環として、青年就農給付金制度への取り組み開始
- 6月 ○五年連続乳質優秀表彰(おかやま酪農協)
- 10月 ○第67回岡山県畜産共進会
- ・カヤベクラリス スタリオン ティアラ(優等賞)
- 11月 ○第8回全日本B&Wショウ
- ・カヤベクラリス スタリオン ティアラ出品
- 3月 ○第一牧場乾乳・初任牛牛舎新築

公益財団法人 中国四国酪農大学校

- 平成25年 4月 ○公益財団法人中国四国酪農大学校へ名称変更
- 7月 ○第一牧場旧搾乳牛舎を分娩牛舎に改装
- 9月 ○第53回蒜山地区乳牛共進会
- ・カヤベツアーリ ノレッジ カノン(H種)がグランドチャンピオン受賞
- ・カヤベセイエラ ブラクストン ソル(H種)がジュニアチャンピオン受賞

- 10月 ○第68回岡山県畜産共進会
 ・カヤベ セイエラ ブラクストン ソル(H種)がジュニアチャンピオン受賞
 ○第31回中国ブロック農業大学校研修生のつどい
 ・ソフトボールの部 初優勝
- 平成26年 1月 ○学生寮整備検討会(40人程度の学生寮を26年度末までに整備)
 2月 ○「全国農業大学校等プロジェクト発表会・交換大会」
 ・第48期古和愛氏プロジェクト発表の部特別賞(日本農業新聞賞)
 3月 ○農場HACCP推進農場の指定
 ○学校評価への取り組み開始
 6月 ○7年連続乳質優秀表彰(おかやま酪農協)
 7月 ○学生寮整備の公募(9/30大和ハウス工業と工事請負契約締結)
 9月 ○第54回蒜山地区乳牛共進会
 ・カヤベ ターラベール オンタイム グランノール ET(J種)がグランドチャンピオン受賞
- 10月 ○第32回中国ブロック農業大学校研修生のつどい(ソフトボールの部 準優勝)
- 平成27年 1月 ○「中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会」本校ホスト役で開催
 (発表:笠岡市保健センター、現地視察:笠岡湾干拓地内農業施設)
 3月 ○学生寮新築(40人・男女共用・シェアハウス式)
 4月 ○「第30回中国地区B&Wショウ」岡山県真庭市で開催
 ・カヤベ ツアーリ ノレッジ カノン号(H種)がグランドチャンピオン(最高位)受賞
 6月 ○8年連続乳質優秀表彰(おかやま酪農協)
 9月 ○日本中央競馬会畜産振興事業により、トウモロコシの収穫調製機器、チーズの加工・熟成機器の整備
 ○第55回蒜山地区乳牛共進会
 ・カヤベ ツアーリ ノレッジ カノン号(H種)がグランドチャンピオン受賞
 ・カヤベ セイエラ アイオーン ヴェントス(H種)がジュニアチャンピオン受賞
 ○第14回全日本ホルスタイン共進会岡山県出品牛最終選抜会
 ・当大学校から4頭(ホルスタイン種2頭・ジャージー種2頭)が選抜される
- 10月 ○「第14回全日本ホルスタイン共進会」が北海道勇払郡安平町で開催される
 ・本校第一牧場からホルスタイン種牛2頭・ジャージー種牛2頭出品
 カヤベ セイエラ アイオーン ヴェントス(H種)(1等賞5席)
 カヤベ セイエラ ブラクストン ソル(H種)(2等賞1席)
 カヤベ テトラ バーバタイム ミステイク(J種)(優等賞2席)
 カヤベ テトラ キヤバリア ソフィ(J種)(1等賞1席)

写真でつづる 50年



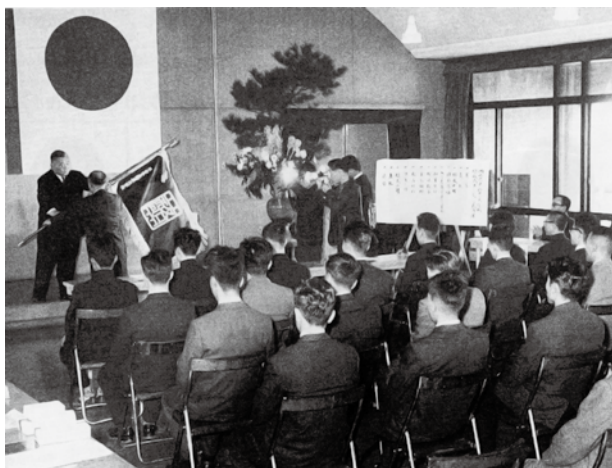
授業風景



野外での授業



第2牧場



県立酪農大学の開校式
校旗授与式(昭和36年)

酪農に関する知識や技術を修得した経営者を養成するため、昭和36年12月1日から津山市の岡山県酪農試験場内に開校し、翌37年4月、真庭郡川上村西茅部の新校舎の落成をまわって、酪農試験場蒜山分場を吸収して移転し、新たに岡山県家畜衛生研究所を併設した。募集人員は、1学年30名で、1年間に4ヶ月就学し、8ヶ月は在宅研修とし、3年修業とした。酪農を志望する青年で、高等学校またはこれと同等以上の学力を有する者を対象として、酪農に必要な教育を行った。施設の概要は、昭和39年現在において、土地5ha、建物32棟、動物は乳牛26頭、和牛2頭であった。(岡山県畜産史より抜粋)



牧場作業

酪大寮歌(かえ歌)

作詞 赤木 晃

(岡山県立酪農大学第二期生)

- 一、嫌じゃありませんか酪大生
黒い顔して長靴で
山に草地にサイロ漬け
夜は福田へ酒飲み
二、朝はご飯と味噌汁で
昼は少なり盛飯で
夜のご飯は一合半
腹の泣く虫おさまらぬ
三、月もさしこむボロ牛舎
写真片手 目に涙
こんな彼女待ちながら
寮で寝るとは情けなや
四、今日は日曜三木ヶ原
派手な服装角帽で
あの娘この娘と目をつけて
見てももてない酪大生
五、月も知ってる大宮の
銀杏樹陰で抱合って
愛す恋すと言ったとて
女は入れない学生寮
六、上の山は酪大で
中の山は先生で
下の山は学生で
三山合せて蒜山いつもなす

昭和40年2月11日付 山陽新聞より

構想進む「中国四国酪農大学校」後継者育成めざす 岡山酪農大学校を改組

中国四国農政局は近代的な酪農後継者を育てるため、財団法人中国四国酪農大学校（仮称）を設立する構想を進めている。これは津山市の岡山県立酪農大学校を発展的に改組、施設を大幅に拡充し、中国四国九県の希望者を対象に、酪農の総合的な教育機関としようというもので、すでに基本線で岡山県当局の了解を得ており、近く農林省に説明したうえ本格的検討に着手する方針。これが実現すれば福島県の日本酪農講習所と並ぶ西日本では初めての酪農総合教育施設となるわけで、同局は早ければ40年度中に施設整備を終え、41年度から開校したい意向である。

構想によると、中・四国九県から各数十万円の寄付金を得て財団法人中国四国酪農大学校（仮称）を設立する。これは純然たる後継者の教育機関とし、本科（定員50人）と通信教育課（同一千人）を置き、中・四国九県の高卒業生を対象に一年間、酪農技術、経営技術を教える。そのため岡山県立酪農大学校の施設、設備の無償貸与を受け、常時ホルスタイン50頭ジャージー50頭以上を飼育できるよう、施設、設備を拡充、その収益で運営する。最高議決機関として理事会を設け、各県から一人ずつ理事を選出、また教授陣も各県から派遣するとしている。

施設設備に必要な追加経費は一億数千万にのぼるものとみられるが、その80%以上を地方競馬全国協会が補助するといわれている。

この構想にたいし、各県はいずれも賛成の意向を表明しているが毎年の負担金支出、教授の派遣など、なお多くの問題があるとしており、きたる16日岡山市で開かれる中・四国農林部長会議にこの構想を出し、検討することになっている。



トラクター演習



登校風景(昭和41年)



大雪のためソリで中福田まで牛乳缶を運ぶ
(昭和43年2月15日)

写真でつづる 50年



昭和天皇皇后陛下下行幸啓(昭和42年4月11日)



皇太子殿下(現天皇)行啓(昭和40年8月3日)



牧野改良実習(昭和41年)



第1回ジャージー共進会(昭和43年10月)



牧野改良実習(昭和41年)



憩いの時



牧草調製実習(昭和41年頃)



ジャージー導入20周年記念大会(昭和49年)



牛乳処理室(昭和47年頃)



集乳缶置き場(昭和47年)



解剖学実習



集乳所風景



気象観測実習

写真でつづる 50年



デントコーン調製(昭和50年)



乾草調製実習(昭和50年)



ロータリーパーラー



ロータリーパーラーでの搾乳
(昭和50年)



乾草調製実習



第1牧場放牧風景(昭和57年頃)



旧体育館



新学生寮(昭和50年代)



旧学生寮(昭和50年代)



ラジオ体操(昭和50年)



食堂での風景(昭和50年代)



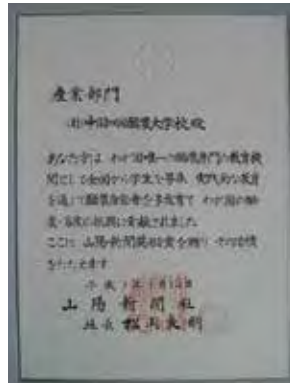
第2回全日本ジャージー大会開催(昭和59年9月)



ジャージー導入30周年記念(昭和59年9月)



20周年記念誌作成
(昭和60年)



山陽新聞奨励賞受賞
(平成3年)



財団法人創立20周年記念行事開催(昭和60年10月)



酪農ヘルパー全国協会委託研修所として
酪農ヘルパー要員養成開始(平成3年)



冬の放牧(平成3年)



30周年記念誌作成
(平成7年)



第1回同窓会総会(川上村老人センターにて)



同窓会出席者(平成7年)

写真でつづる 50年



放牧風景(平成8年)



馬用パドック新設(平成4年)



ポプラ並木をリコーと散策
(平成6年)



餅つき(平成7年)



天の岩戸開運まつり(平成6年)



牛舎全景



牛舎内部



台風によるポプラ倒木
(平成9年)



第2牧場堆肥舎新築(平成9年)



フリーストール牛舎新築
(平成9年～10年)



旧校舎閉舎式(平成7年6月22日)



旧校舎とりこわしの為体育館へ引越



体育館2階 仮事務所設置



新校舎建設



財団法人創立30周年及び
本館新築落成記念式典



カヤベ ライラック ハーミテージ ペガ
登録番号 23518 生年月日 H07.09.17
所有者 財団法人中国四国酪農大



カヤベ マウントパール ダイオン ブラウン
登録番号 25678 生年月日 H10.07.1
所有者 財団法人中国四国酪農大



高円宮殿下からH種最高位賞(高円宮賜杯)を授与される永禮淳一さん(第27期生)

カヤベ ライラック ダイオン レインボー
登録番号 25888 生年月日 H10.12.30
所有者 財団法人中国四国酪農大



カヤベ ブルー ダイオン フェスタ
登録番号 25761 生年月日 H10.03.18
所有者 財団法人中国四国酪農大



第11回全日本ホルスタイン共進会 第3回全日本ジャージー共進会
ジャージー種4頭出品(平成12年11月2日~5日)

写真でつづる 50年



小学生のふれあい体験(平成10年)



小学生の搾乳体験(平成10年)



エコオフィスペーパーシュレツダ
敷料利用実証試験



バス購入 宝くじ協会助成
(平成17年)

ふれあい広場



第12回全日本ホルスタイン共進会
第4回ジャージー共進会
(平成17年11月3日～6日)



ジャージー最高位賞(内閣総理大臣賞)
を授与される美甘正平さん(第34期生)



ジャージーフォーラム 蒜山地区酪農大校視察(平成12年)



TMR導入(平成10年)



貝殻利用尿浄化施設設置(平成16年)



ふれあい広場(平成17年10月)



40周年記念誌作成
(平成18年)



同窓会で新牛舎のおひろめ
(平成 18 年 7 月)



新牛舎の中



クリアファイル 2 種作成
(平成 24 年)



第 1 牧場旧搾乳牛舎を
乾乳牛舎へ改装(平成 19 年 3 月)



乾乳牛舎の中



蒜山登山 (平成 23 年 6 月)



カンボジア王国皇族 ノロドム・シリウット 殿下来校
(平成 23 年 3 月)



蒜山雪恋まつりボランティア参加
(平成 26 年 2 月)



第 31 回中国ブロック農業大学校研修生のつどい
ソフトボールの部初優勝 (平成 25 年 10 月)



ソフトボールの部
優勝盾



ホームページリニューアル
(平成 25 年)
<http://www.rakudai.ac.jp>

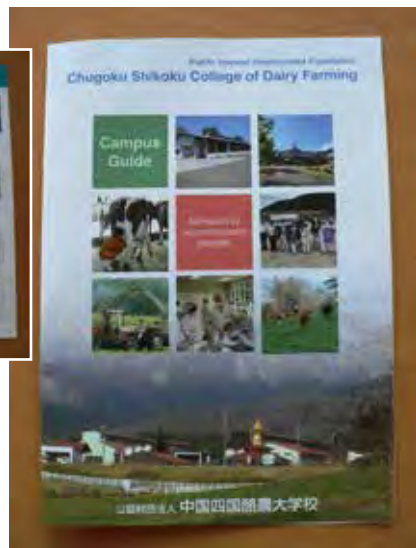
写真でつづる 50年



デーリイマン2014.1月号



学校要覧英語版作成
(平成26年)



デーリイマン取材(平成25年12月)

学生寮建設風景(平成26年11月～平成27年3月)



地鎮祭



型枠工事



建方工事



完成





第30回中国地区B&Wショウ
カヤベ ツアーリ ノレッジ カノン号がグランドチャンピオン受賞
(平成27年4月)



平成26年度中国四国ブロック農業大学校等プロジェクト発表会
本校ホスト役で笠岡市で開催(平成27年1月)



オハヨー牛乳(株)から岡山県産生乳100%の新商品
「晴れの国 おかやま牛乳」が販売される
パッケージに酪大の校舎写真が採用(平成27年6月)



試作ブルーチーズ



チーズパット



トウモロコシの収穫調製機器、チーズの加工、熟成機器の整備
(日本中央競馬会畜産振興事業)(平成27年9月)



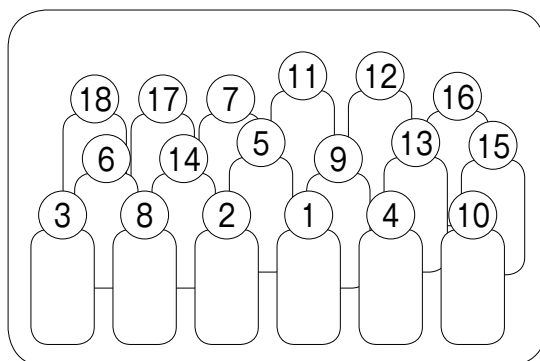
第14回全日本ホルスタイン共進会
H種2頭、J種2頭出品(平成27年10月)

学科目担当講師名簿 (平成 26 年度)

講座名	科目名	担当
酪農経営学	畜産概論	愛媛県・池田技師
	酪農基礎学	鳥取県・岸戸副校長
	畜産物流通論	中国四国農政局
	酪農経営演習Ⅰ	池田技師
	酪農経営演習Ⅱ	岡山県畜産協会
	農業簿記	
飼料学	飼料学	芦田第二牧場長
	自給飼料学	広島県・長綱農場長
	飼料計算演習	山田技師
	牧草飼料作物演習	長綱農場長
家畜繁殖学	家畜繁殖学	山口県・徳島県
	家畜改良学	高知県・新宮技師
	家畜審査演習	家畜改良事業団・長恒泰治(酪農家)
飼養管理学	飼養管理学	高見技師
	搾乳理論	村田技師
	肉用牛管理学	岡山県農林水産総合センター畜産研究所
	飼養管理演習	新宮技師・山田技師・長綱農場長・村田技師
	酪農機械演習	中国オリオン(株)・長綱農場長・池田技師
	検査演習	金谷技師・関教務課長
家畜衛生学	家畜衛生学	兵庫県・島根県
	解剖生理学	香川県・島根県・関教務課長
	牛削蹄演習	岡山県装削蹄師会
環境保全学	畜産環境保全学	岡山県農林水産総合センター畜産研究所・広島県
	土壌・肥料学	岡山県農林水産総合センター
畜産利用学	乳肉加工学	岡山県農林水産総合センター畜産研究所
	観光酪農概論	高見技師
	乳肉製品製造演習	岡山県農林水産総合センター畜産研究所
特別講義	畜産新技術	岡山県農林水産総合センター畜産研究所
	酪農経営事例紹介	外部講師・酪大職員
	畜産施設視察	岡山県生乳検査センター・鏡野クーラーステーション JA全農おかやま総合家畜市場・大山乳業農業協同組合 岡山県農林水産総合センター畜産研究所・岡山農業公園ドイツの森
	講話・教養	校外講師・酪大職員
卒業論文	卒業論文	酪大職員
	校外研修報告	
酪農実習	酪農実習	酪大職員
	実務研修(校内)	
	実務研修(校外)	全国先進農家

◆ 現 職 員

氏 名	勤 務 期 間	職 名	番号
山田 義和	H 25. 4 ~現在	校長	1
岸戸 武士	H 9. 4 ~H 11. 3	教務課長	2
	H 11. 4 ~H 13. 3	課長補佐	
	H 13. 4 ~H 14. 3	第二牧場長	
	H 25. 4 ~現在	副校長兼総務課長	
有富 英美	H 12. 3 ~現在	総務係長(主任)	3
関 哲生	H 21. 4 ~H 24. 3	第一牧場長	4
	H 24. 4 ~H 25. 3	教務課長兼第一牧場長	
	H 25. 4 ~H 26. 3	教務課長	
	H 26. 4 ~現在	教務課長兼第一牧場長	
高見 奈々	H 17.11 ~現在	教務課技師	5
金谷 真澄	H 26. 4 ~現在	教務課技師	6
谷口 育子	H 15. 4 ~現在	調理技術員	7
長綱 則之	H 14. 4 ~現在	農場(圃場)長	8
新宮 由子	H 25. 4 ~現在	第一牧場技師	9
芦田 草太	H 13. 4 ~現在	第二牧場長	10
池田 良弘	H 11. 4 ~現在	農場(圃場)技師	11
村田 崇浩	H 20. 4 ~現在	第二牧場技師	12
山田 祐季	H 23. 4 ~現在	第二牧場技師	13
法花千恵美	H 16. 4 ~H 20.11	総務課臨時	14
	H 21.11.1 ~現在	総務課臨時	
樋口 照夫	S 55. 4 ~H 17. 3	第一牧場助手	15
	H 17. 4 ~H 19. 3	第一牧場技師	
	H 22. 4 ~現在	第一牧場臨時	
小椋 麗子	H 18.11 ~現在	調理臨時	16
西田 都	H 23.12 ~現在	調理臨時	17
牧野 晴美	H 22. 7 ~現在	調理臨時	18



卒業生の進路状況

区 分		酪農等後継者		畜産関係団体等		そ の 他		計	
卒業年度	期 別	人 数	内岡山県	人 数	内岡山県	人 数	内岡山県	人 数	内岡山県
県 立		18	18	5	5	61	61	84	84
S41 ~ S50	1 ~ 10	178	112	67	35	77	23	322	170
S51 ~ S60	11 ~ 20	179	90	31	17	41	9	251	116
S61 ~ H 7	21 ~ 30	106	39	64	20	37	6	207	65
H 8 ~ H17	31 ~ 40	81	23	126	38	26	6	233	67
	H18	41	10	3	9	3	7	4	26
	H19	42	11	3	8	2	5	5	24
	H20	43	8	2	14	8	1	0	23
	H21	44	2	0	13	5	1	1	16
	H22	45	6	1	6	2	1	0	13
	H23	46	3	0	19	8	4	2	26
	H24	47	4	1	15	4	0	0	19
	H25	48	6	1	15	4	0	0	21
	H26	49	6	1	19	4	1	0	26
	H27	50	—	—	—	—	—	—	—
総 計		618人	294人	411人	155人	262人	117人	1,291人	566人
割 合 %		48%	52%	32%	27%	20%	21%	100%	100%
近 年 5 年		25人	4人	74人	22人	6人	2人	105人	28人
割 合 %		24%	14%	70%	79%	6%	7%	100%	100%

酪農への専門技術員養成研修会の実施状況

区分	全国研修					特別 1週間 社会人	中堅 1週間 社会人	合計		
	初任者				小計				Aコース	Bコース
	一ヶ月		2週間						2週間 社会人	1週間 社会人
年度	社会人	学生	社会人	学生						
H 3年	3人				3人				3人	
H 4年	4人				4人				4人	
H 5年	11人	14人			25人				25人	
H 6年	14人	12人			26人				26人	
H 7年	16人	5人			21人				21人	
H 8年	17人	24人			41人				41人	
H 9年	11人	17人			28人			10人	38人	
H10年	12人	16人			28人			9人	37人	
H11年	11人	23人			34人			5人	39人	
H12年	9人	20人			29人	2人		7人	38人	
H13年	9人	16人			25人	5人	6人	8人	44人	
H14年			12人	15人	27人	5人		6人	43人	
H15年			22人	24人	46人			7人	59人	
H16年			14人	17人	31人			2人	37人	
H17年			11人	20人	31人			8人	43人	
H18年			14人	19人	33人			4人	37人	
H19年			16人	12人	28人				31人	
H20年			13人	8人	21人				25人	
H21年			13人	11人	24人			6人	33人	
計	117人	147人	115人	126人	505人	12人	6人	33人	624人	

区分	初任者研修Ⅰ 2週間		初任者研修Ⅱ 1週間		初任者研修計		中級者研修 1週間 社会人	合計		総合計
	社会人	学生	社会人	学生	社会人	学生		社会人	学生	
H22年	5人	10人	4人		9人	10人	5人	14人	10人	24人
H23年	6人	3人			6人	3人		6人	3人	9人
H24年	9人	3人			9人	3人		9人	3人	12人
H25年	5人	11人			5人	11人		5人	11人	16人
H26年	2人	5人			2人	5人		2人	5人	7人
H27年	4人				4人			4人	0人	4人
計	31人	32人	4人	0人	35人	32人	5人	40人	32人	72人

酪農フィールド研修の実施状況

区分	初任者研修			体験研修			合計		総合計	備考
	2ヶ月		1ヶ月	2週間		1週間	社会人	学生		
年度	全酪連	酪農協	酪農協	社会人	社会人	学生	社会人	学生		
H23年		2人					2人	0人	2人	広酪:2
H24年	8人	1人	1人			10人	10人	10人	20人	全酪:8、おか酪:1、広酪:1、吉備国:10
H25年	8人			4人		12人	12人	12人	24人	全酪:8、民間:4、吉備国:12
H26年	8人			1人			9人	0人	9人	全酪:8、おか酪:1
H27年	6人			1人	2人		9人	0人	9人	全酪:6、おか酪:2、中販連:1
計	30人	3人	1人	6人	2人	22人	42人	22人	64人	

※H 2 4年度から「酪農フィールド研修科」を新たに設置した。

編集後記

「中国四国酪農大専校」が、財団法人となり50年目の節目を迎えるにあたり、「50年のあゆみ」を発売いたしました。

長年にわたる関係者の皆様方のご支援とご指導によりまして、ここに栄えある50周年を迎えることができましたことを厚くお礼申し上げます。

また、今回の発売にあたり、ご祝辞をいただいた関係者の方々を始め、原稿及び写真をいただきました皆様方にはご多忙の折、大変ご無理をお願いしましたことに対し、深甚な謝意を表する次第です。

とくに、今回は、卒業後10年以内の若い卒業生の方々や、夫婦で活躍する方、家畜改良で岡山を牽引する方から近況報告をいただき、今の活躍はもとより、次代の担い手としての奮闘や期待を伝えることができたものと、編集に携わったものとして何より喜びを感じております。

この記念誌の発売を通じ、関係者の皆様、卒業生の皆様の絆が深まり、未来の酪農の発展につながることを祈念するものであります。

今後とも、中国四国酪農大専校に対し、末永いご指導ご支援を賜りますようお願いするとともに、皆様方のご健勝をお祈りいたします。

財団法人中国四国酪農大専校創立50周年記念

50年のあゆみ

印刷発行 平成27年11月
編集発行 岡山県真庭市西茅部632
公益財団法人中国四国酪農大専校
公益財団法人中国四国酪農大専校同窓会
電話 0867-66-3651
FAX 0867-66-3652
印刷 岡山県真庭市勝山264
富岡印刷株式会社
電話 0867-44-2134